



091444-000-3

特10-654

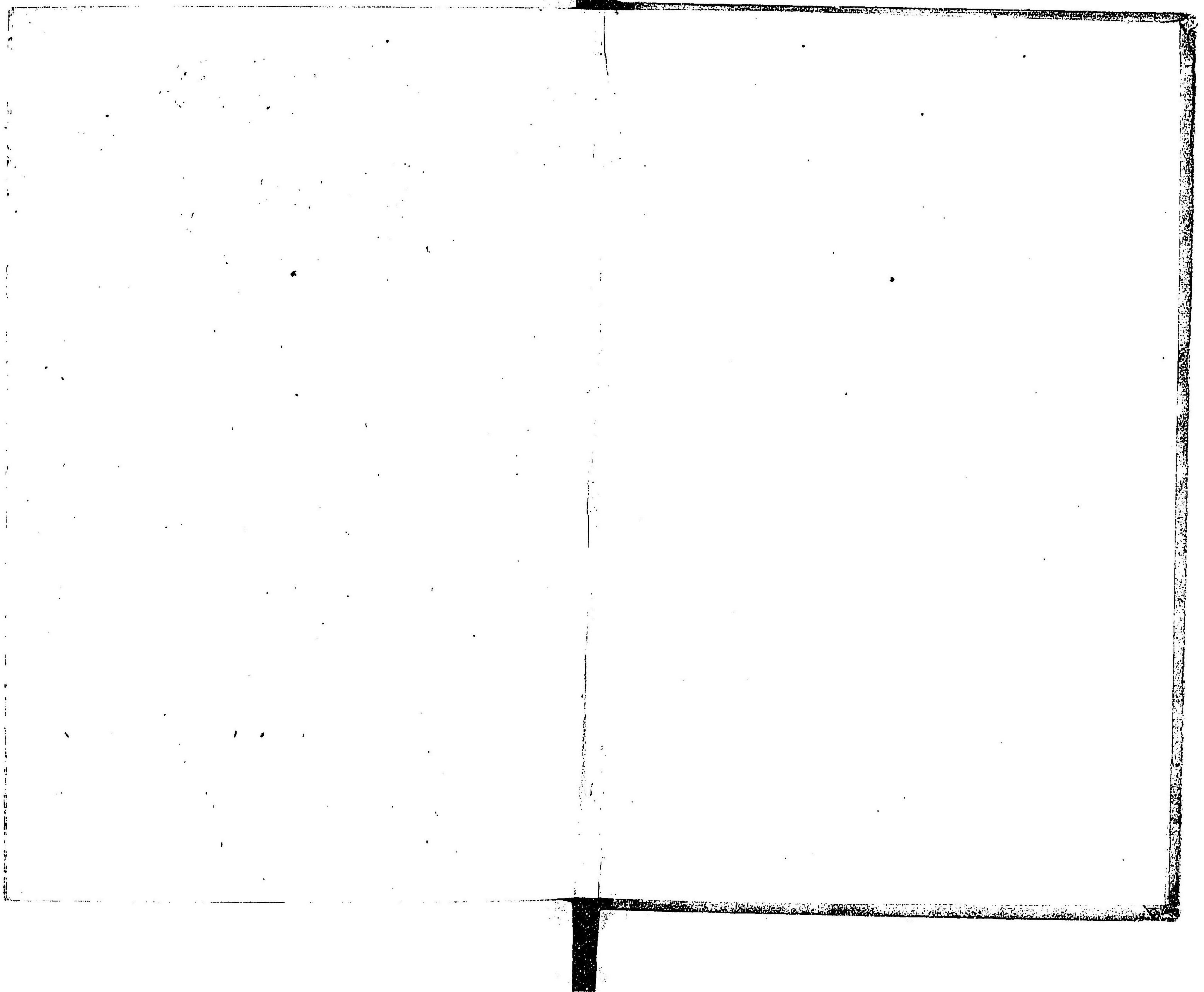
陸奥の松風

井上 勝五郎 / 刊

M20

DBN-2358





古を温ねて新規き趣向を競ふ文化の聖世には發刊の書籍現に汗牛も曾ならぬ實録あり小説あり種々様々の奇事異説日に倍し月に殖るが中て福山奇談は是迄世人が夢よたもいざ白川の關越て奥は其方か松風便の聞得し實録の隠れたるを明し潜るを揚げ善を勧め悪を懲す無厭が自任の毀譽褒貶然とて勃卒理屈は言の巧める毛親の縁のせいで面白く綴なし巻を開けば千狀萬態松柏摧て薪とある貞婦の非常の艱難より忠臣義僕が憂苦の容毒婦奸臣が跋扈暴日辰日時を傳臺るも終に逃れぬ天の網惡人滅亡て善人榮ゆる目出談の奇々妙々なる目先の換つた實説物尤も以て面白き其趣きの悉しきは文字に遊ぶ婦幼達に瀏覽の後知るよしあらんと茲に卷中の評判を掲て序文の屬托の塞ぐ事爾矣

芳馨舍菡溪述



奇談 10  
654

福山 陸奥の松風

○ 第一編

今昔徳川將軍國命を執て猶武威を宇内よ輝かせし慶應の初年陸奥國松前福山の城主  
 松前志摩守忠廣ぬしに松の方の鈴の方と云ふ二人の愛妾あり松の方の十九の鈴の方の  
 廿二桃と櫻の色競彼平相國が寵を争ひし佛祇王も此やと思へるゝばかり世にも稀なる美人  
 なり松の方の家臣某の娘にて身許も賤しからねバ心性もあつと優に美しく且詠歌執  
 筆ことを始め香花茶の湯などあらゆる諸藝に通じ世に所謂才色兩全の女なるにぞ忠廣ぬ  
 しの寵愛日に月に添もきて今の情の胤をも身に宿しければ家臣のおもひよせも一入にて松  
 の方の松の大木の御蔭に寄りめと吾勝に懸仰げばさながら奥方にも異ならざる勢力ありか  
 鈴の方の之に異り賤き商人の家に生れ只美貌のみを以て召出されたる事故に自然心も仇々  
 しく舞三絃の遊藝こそ少は辨たれ風雅の道は何ひとつ愛むたる事なけれバ忠廣ぬしも始  
 めの中こそ渠が色香を愛たまひたれば心は秋風を吹せ初めつゝその通路もいつしかに枯  
 野にすだく鈴虫の振捨てのみたさ給へバ侍女使女下婢共に至るまで漸次に之を輕蔑て鈴虫



の何程聲振立て鳴くとはすれどいりて千代をかねたる松虫の音の最愛らしきに及ばんやな  
 ど名に物をよそへて口善悪なく隠言いふさへ時々耳に入らざらでだに嫉妬心勝れたる鈴の  
 方の心に修羅の炎を燃し妾かく殿の寵を失ひ人の侮りを受るも其原を押バ那松虫奴がわれ  
 をこそ殊ま染めは殿のお胤を身に宿せりとか今さへあるに若世繼の男子など産落しなバ愈  
 此身はあつるがなしに取扱はれんにさる事のなき間に彼を無き者になし昔に優りて殿の寵愛  
 を身ひとつに専にし是迄此身を侮り輕しめたる奴原に一々痛く當りこの怨を報ひてくれ  
 んものを何か好き手段のなからずはやと思ふ心の頬にいで、何時しう夫と了られけん豫て  
 心知りなる侍女ふちが一日傍に人なき時を窺ひ「此頃貴卿の御容体を伺ふに兎角御不御勝  
 に見受らるれば御病氣の根は大方是と察して或る御醫者様に御容体をお話し申せしに早速  
 藥方書を下されました此お國にて一と云ふて二とは下らぬ御名醫の事なれば此藥方に隨ふ  
 て御療治ををなされたら御全快は疑ひなし且兎も角も御一覽と文函の紐をどくく差出  
 す一通手に取上て鈴の方は不審氣に懸し秋野の鈴虫様女子の指の島田某方と上書詠て小  
 首を傾けやがて中をも讀下せしが何か心に點頭「流石名に負ふ名醫程ありて妾の疾病に適

當の此藥方早速療治をお願ひ申さんと料紙取寄さらく〜と様子は何の白紙に仔細ありげの  
 返事した、めいざとばかりに渡したる文の文句が發端にて十九年の久しき明治の今日に及  
 ぶまでの長物語を惹出す筆のあやこを畏しけれ

○ 第二 編

夫は借宿安に又か松の方は殿の寵愛深からず殊にお胤をさへ身に宿したれば嬉しさ限りな  
 けれど、奥方始めお鈴の方の嫉妬の程も恐ろしく夫を思へを中々に心やすまる時もなく今  
 日も癪に打附て終日部家と垂籠つ一人机に打向ひ徒然なぐさむ種にもと田舎源氏を聞すれ  
 ばかのはなぎりの身の上の身につまされていと、猶胸を痛るその打柄侍女おのふが手を支  
 へ「只今お表お歸りがけお鈴様のお部家の前を何心なく通りか、ればお部家と（お鈴を指  
 す語）おふちが（前にいでたる侍女の名）問詰密話お熱々ど時々に卿のお名を呼ぶ聲の耳に  
 這入を仔細をあらんとソツト隙子よ身を寄て様子を聞バ大曲たお鈴様は頃より那のお  
 ふちの周旋で御側御用人の島田様と道ならぬ契を交す計か今宵を過ぎず刺客を以て卿を首  
 尾能く刺殺し其身ひとつに殿様の寵愛受て内と外互に強事を援台てお國の政事を二人が隨

意々々に飽迄榮耀を極むものと謀反に際しき悪計の段々闢らす聞取ヌハ大變少も早く御注進をと急で返るお廊下にて足にかゝりし一封の書状宛名を見れば鳥さませいる鈴よりと書しは正しく二八の密書是ぞ悪事の確な証據天の興へと押戴そのまゝ持て歸りせしと云ひつゝ帶に手を差入搜せど無れば駭き顔そのまゝ後へ駈返るをお松の方のヤ、と呼止め「聞捨ならぬお家の大事夫が證據となるべき書状を取落せしは残念ながら人は繁き長廊下いつまで其處に落ても居ませし今宵刺客を寄來すとあらば妾は兼所を取替て手筈を定て刺客を捕へ夫を證據に二人が悪事を殿の御前へ訴出んさてその手筈は此うくどおのふが耳に口を當必ず脱りて取逃すな確な證據を得る迄の二人が悪事の云々を夢にも人にな漏しぞと始終の事を言合め其夜の初更の鐘を相聞に例の寢所ををらんと服出化粧部家へと身を忍び今や刺客の來るかと思を凝して窺ひるる既に其夜も更渡り廊下を照す燈火も稍薄暗く鳴る鐘の音幽なる丑滿時或はさしもに噴き女子の鳥の奥服も只寂然と部家々々に鐘の聲と齒切の音のみ聞ゆる其折柄何處がしか忍人けん黒装束せる一人の曲者愛妾お松の部家の入口スツクと立て耳傾け内の様子を窺と窺ひ何か心に合點つゝ障子をそらと引明て頼て内に這

入ける

○ 第三編

却説曲者は松の方の部家に這入り燈火消て眞の暗捜索ながらに奥まりたる寢間と覺しき處に至れを足に觸りし絹浦團扇を一刀抜放し右手に提げ左手にて探れば床の藻抜の売コハ不審と立上る途炭の拍子に一間の中女の聲の高やかに曲者あり出合へくと呼る聲と語共に障子にバツト燈の光り寫るが否や電の閃く如く手々に長刀短刀ひらめかし露出たる多くの女中孰も身輕に裝束て逃さじものと押取悉ギョツと仕ながら曲者は一方切抜免るゝ覺悟太刀振翳して飛鳥の如く此處を先達と戦へと女ながらも手練の面々右左より長刀短刀透間もあらせず打込ば遂に手足に薄手を負ひ太刀打落され平伏りけり得たりや應と女中の面々をり重りて手取足取八重細掛て引縛り冠りし頭巾を取除ればついに見なれぬ男なり何者に頼れてかゝる不法の働きをなせしを眞直に白状せよと長刀の柄にて摺上げし糸彈すれど曲者の兩眼閉して覺悟の体素より某一存にてせし事ならぬと其依頼人の名は殿か家老の前ならでは決して詔と語り責れと擲けど其餘は一言も口を開ぬバ據るなく右の云々

を言て表へ引渡し嚴重の吟味を請ひしに曲者は其夜の中獄屋を免れ何處ともなく透電な  
 しけり「爰ハ松前家奥御殿の前裁朝清めする二人の下部「ナント喜之助此ういふと芝居の  
 密詞めくか朝から晩迄働いても意氣な女は借置て甘い酒一杯飲ことは出来ず偶々此うして  
 奥庭の除掃に来て椎并番の豊満的水澤山な女中達の顔を見るのが楽しみとは實に取果ない己  
 等の境界偶には人間普通の遊びをされるやうな好い錢散けの口はないか有は半口取てくれ  
 と遊戯交りに問掛けバ喜之助は薄笑ひ「錢散けの口はないかどの誦しも能くいふ事だが滅  
 多にゐるといふ返事をする其もないものといひつゝ懐中より一通の書状を取出し「トキニ  
 七助前刻廊下の下で如此な手紙を拾つたが万一錢散の種には成るまいか己は手前の知てる  
 通りいろはのいの字も讀ぬ明言手前之を讀んで見てくれ若錢に成る品物なら細工は流々仕揚  
 の上で〇は屹度山分にするからと見せる書状を七助受取「己もチット姑目でよめにくい方  
 かれと女の文なら分るか知れぬドレと手に取り上書の名當を讀で一工夫「女のくせに大層  
 むつかしい字を書くさつた表は借置て中の文句は如何な事だと封押明て屹度となり「エ、  
 何を來る何日のお茶の湯に辛ひ茶道珍庵も分附て殿様を毒殺いたした跡は彦幼君の事なれ

巴卿と吾等  
 どお國の政  
 事を手に握  
 り思ひのま  
 んに榮華を  
 つくし申す  
 べく候と讀  
 を聞より喜  
 の助は顔色  
 變て進み奇  
 り「ナニ殿  
 様を毒殺すると夫ぞ正しくお  
 家の大事シア〜文の書主と





當名は誰だと言渡し問掛ければ七助は高笑ひ「ト書てわれは録儲けの種になるけれど其様事は芝居狂言か草双紙でなければ見る事出来ね此書状の本文といふのはお嶋といふ下婢が里へ熱芋と蒔藪のおでんと團子をねだりよやる文よ如此なるものが何になるものか然し枕紙には成るから讀賃に貰て置うとぐる〜と巻て懐中に入れば喜之助はザツカリし「エ、何の事だ面白くもねへ大事の密書だと思つて耳に力を入れて聞いていたのに其様な書状なら用はねへ可惜暇をつぶさせやアがつた時に最う掃除も概略すんだからそう〜行ふじやアねへかど箒かたげて先に立つ後より七助塵取提げ懐中廣げて以前の文上書眺めて莞爾一笑思はず長やかなる言をペロリとも此下部は善か悪く忝ひし一通は如何なる書状ぞ开は次々を閱て詳細に分解べし

○ 第四編

お鈴の方にお松の方を人知ず殺害させ平生の望みを遂げなれと思ひの外に事洩て召捕れしと聞しとは胸安からず思ひしが其夜の中又曲者は行方知ずと立騒ぐ噂に情は彼人が術計を用ゐて逃せしか但は一人遁れしか何は兎もあれや、安心とはいふもの、彼人に逢て話を聞く

迄は胸安のらぬ事なりと待間も長き長廊下待女おふちが案内に連れ忍來りし島田彌太郎夫と見るより寢所に誘ひお鈴は聲を打ひとめ「今も今とて只一人昨夜の騒ぎに胸のみ痛め人又語れぬ物案じ夜の間渠が逃しといへば少しは胸の安堵たれど卿に逢はねば様子分らざ若此事より大事の漏なば夫こそ二人が身の上と言へば彌太郎打點頭「さればこそ其事なれ渠奴が事を仕損じて召捕れしと聞しより事露れぬ其間に身を藏させねば後日の思害と思へば少も脱落なく豫て慈惠を懸ねきたる半番某に分附て夜の間又獄屋を引出し路用を與へて定らせたれば一つの危急は逃れたれど只氣にかゝるは昨日の夕方おふちが落せし件の密書今に行方の分明ならず若拾ひたる人又依りては夫こそ二人が一大事と密話問談の聲もれてやおふちはそと入來り「今お話の又のこと素より妾の罪なれば情願行方を探らんものと事に附并夫とはなしに心をつくして穿鑿せしにお庭掃除の仲間の中拾ふた者のある様子さる下賤の者の習ひ若彼文を強談の種金に仕やうの下心其結構ではあるまいかと夫が誠心に心掛りて聞て彌太郎莞爾笑ひ「イヤ其謔ならべ心配無用金にて事のそむことなら假令幾千兩かゝるとも夫に少も厭ひのなければ全く仲間が拾ひしか尙能く探索してくれよといふその折

柄音高く響く時計は早九ツかふぢは片頬に笑を含み「そのお話を承せはりまして妾も大きに安堵せり何うの話に夜が更て今の時計は最う九つ残る話はお床の中まで緩々かつくし成れませ妾はふ次へハヤお暇といひ捨て行くその迹は二人もやがて床の山いつか話の聲も絶前裁にすだく虫の聲萩吹く風の音耳聞夜は深々と更もさけり「昇る旭は玄關の砂子を照し臺處には仲間若黨が出仕の伴の支度最中厭には馬の頬に嚙く朝七つ頃側用人島田彌太郎の玄關先へ一人の仲間が入來り「へいお頼み申します

○第五編

居間の椽側せんがわに茵いんを展ひらかせて家主彌太郎は其上そのうへに坐まを構かまへ庭にわに躊躇ちゆうちゆうたる一人の仲間ちゆうけんに打向うちむかひ「仲間七助ちゆうけんしちすけとは其方そのほうか是非せいひ此方このほうに親したしく對面たいめんして言度いいたき事ことありと辯まをすの頼たのみなる由よし取次とりじりの者ものより承うけたまはりしが如何いかなる事ことを疾さくく語出かたりにいへと物もの和やはかに問掛とひかれ七助しちすけは頭かぶを掻かげ「お目通めとほならでは中上なかつうじやう難がたき一義いぎといふといひつゝ腹懸はらかけの隠かくれより一通いっとうの文ぶんを取とり出し「昨日きのうの朝與あさ湯たく殿でんのお庭掃除にわはらひに行ゆきお廊下ろうかの下したで此この一通いっとうを圖はかす拾ひろひ就つれお末すえかお下碑したいがお里さとへ物ものをぬだりの書狀てがみか但たしは情郎せいきやうへ戀交こひがり双方ふたうに仕しても枕紙まくらかみか烟管掃除えんくわんはらひの用ようには立たつと持もつて歸かへつて何心なにごころ

なく開ひらいて讀よみ思おもひさや色いろと慾ぞどの二筋道ふたすぢみち々に背そむいた文句ぶんくの段々だんく愛妾あいせうお松まつを殺ころした上うへにて殿のを欺あざむきお國くにの政事せいじを二人ふたりの隨意まにまに々々握にぎらん結構けつこう當名あてなは謂いはせど其方そのほうで御承知ごしやうち是これを表あらわへ持出もつ時ときは世よの體たいにいふ一字いちじが千金せんぜん多くの褒美ほめいにありつく事は目前めづらに見みえたる話はなしなれど文ぶんの遣やり主請取主ぬしうけぬし二人ふたりの更文あらたは云いふに及およばず之こゝに關係かへする數多あまにの人等ひとらの命いのちに及およば知しれた事ことそんな無益むいぎの殺生せつしやうするより旦那だんな賣うるのが上分別じやうぶんべつと平生へいぜい優しい慈悲じいしん心こゝろから人を殺ころさぬ情なげの計はかみお宅たくを見みかけて持もつて來きやした他の進累しんらいは措そて首謀くわいがい二人ふたりの首代くわいがいをば安やすく積つつて一個いっぴきが五十兩かたて二個ふたこ合あせて丁度百兩ちやうどひゃくらう何なにんと安やすいじやありませんか朝商あさあきなひに負まけておくら四の五の謂いはずにお買かなせへといふを聞きくより彌太郎やたろうは膝ひざを進すすめ扇あふぎを杖つゑ「其手紙そのてがみの當名あてな且かつは文句ぶんくは兎も角も持もつて來きた親切しんせつと話振はなしの徒氣たけなのが氣きに入りたれば其方そのほうの言直いひな通り百兩ひゃくらうで買かつてやるいざどの手紙てがみを是こゝへ出だせと百と七助頭しちすけかぶを振ふり「玉たまは其方そのほうへ巻まけて神かみは延金のぶがねといふ芝居しばいでするやうな古手ふるての事を喰くふ七助しちすけではござらぬ書狀てがみが欲ほくは百兩ひゃくらうの金かねから先まへお渡わたしなされど飽迄あたままで不適ふていの言い狀じやうに彌太郎やたろう無なき感かん心しんし「下郎げらうに似合にあぬ好よい度胸暗殺どころあせしなどさる身み怯ひな事ことをする彌太郎やたろうならずさりながら疑うたがはしく其方そのほうが言狀いひじやう通りに仕して取とらせんといひつゝ立たつて床とこの間まなる手箱てはこ持もつ

出し其中より金の包を取り出し扇に乗て傍におき腰刀をバ速く放遣りし品物と引替に金を取せん近うまゐれと優しき辭に七助は漸く安堵の顔色に



て「引替にさへ仕てくださるなら何の否やを申しましよういざお受取下されと差出す番状と右左金を渡せば取て置き行んとするをや、と呼止め「猶頼みたさ一儀わりと云ふに七助畏怖ながら「外に用とは何の汚用と立返るを身近く呼寄耳よ口當叫くを七助聞て風々點頭「お頼の一條を程好くやつた其上では「褒美の金は望次第猶其上に士分に急度取立仕いさん當座の褒美の手附代り是をと渡すを取て莞爾「百圓貰ふた其上に又二十兩とは有難い金にさへなる事なら命にかけても彼一事を「必ず脱るな合點かと猶念を押その折柄四ツの城鼓の音ドク〜〜最早その日も黄昏て三つ四つ五つむら鴉鳴つ、渡る入相頃下部一人を伴に連いさせき來かゝる一人の女中跡より逐來る一人の仲間「モッ〜米野様と呼ばれて女中は後振返り「チ、其方はお庭掃除方の「ハイ七助めでござり升卿に少々内分でお話し申したい事があつて失禮ながらお呼留め申しましたお手間は取らせませぬ一寸お顔をど傍の物蔭へ誘ひ行けり

○ 第六編

諸も仲間七助は米野を傍に誘ひて四邊を窺ひ聲を低め「必一人に漏さしと誓を立たる事な

から謂で叶はぬお家の大事此處で卿に逢ふたを幸ひ身の潔白を一通申上たき下郎の情  
 願事長くとも聞しめせ今より四五日前の事お松の方の侍女おのぶが下郎を去方に招寄酒よ  
 香と馳走せし上に多くの金迄賜りて倍改めて云るやう今日の馳走は松の方より其方にお  
 依頼の筋あつて夫故態をなされしなり如何に御用を承りるやと思ひ懸なき尋の音に下郎は  
 何の心もなく御用を聞くのは下部の役身に適ふ程の事ならは如何様の事なりとも聞てお  
 のぶは莞爾笑ひ其方へ御川の筋と云ふはと下郎の耳を引寄て御主人松の方様には殿のお胤  
 を宿し給ひ然も左孕みにて御男子なる由貞齋様の確な御診察和子様御出生の上おらは御世  
 繼にもと思へども其方も知ていやる通奥方綾の方様に敦丸様といふ立派な若様のある上  
 迎も川はぬ世繼の望とお部家様にいふ夕にその事計り御苦心なさるを傍に見てゐる妾の切  
 なさ一日人なき折を窺ひお庭掃除の仲間七助渠の見處あるもの故渠を頼て邪魔になる敦丸  
 様を除んものと妾の心をお話申せば夫は何寄の思附其七助とやらを頼込み云々なすやう計  
 はせよ本望成就の上からは褒美は渠が望に任せんと世も切なるお部家の仰せ早速お承け  
 のお答申して此は其方を呼寄しなり御用の筋を承り仕途てくるゝとわらば重疊若も

否やをいふならは大事を漏せし此身の辨解此場の立せと覺悟せよと懐劍逆手に手詰の談判  
 女ながらも武家の侍女心死の形相侮りがたく若も此場で否やを言ひなば忽地命を失ふべの  
 りかお家の大事を漏す者なし犬死せんより命を長經此一大事を與様へ注進するのがお家の  
 爲と早くも心に思案を定めて御川の次第は確に承知假令下郎が命に掛ても透を窺ひ敦丸様  
 をバ屹度失ひ参らせん其時褒美は必ずと態と早速擔任て危き其場を逆歸り右の大事を云々  
 と直に訴へ申さんどは思ひ乍も下郎の悲しさ若偽りと言消れんうと取越苦勞に日子を送り  
 つ情願程能き便もがなと思ふ矢庭に末野様卿に此處にて御目に掛るは世の壁にいふ渡りに  
 舟右の次第を與様にお告申して速に其御手當をなされませと眞實しやりに言出る言を聞  
 て驚く末野夫が眞實であるならば聞捨ならぬお家の大變と身づくろいする袂を執へ末野殘  
 せし事ありと耳に口寄叩けば末野は愈々顔色變へて情は此程松の方の部家へ曲者の忍入し  
 は已が腹心の者を玉に使ひ與方が嫉妬心より使はせしものと殿に疑念を抱せて御夫婦の中  
 を割く奸計にてありしか思はば長しき渠が謀略少も早く此事を綾の方様へ御注進七  
 助大儀褒美は孰れ後日の御沙汰と言達しく言捨て細帯引締どつかはと御殿を指て走歸る迹

打詠て七助の莞爾笑ふて打合點元來し道へと引返しぬ

○ 第七 編

奥方附の女中末野は七助の偽計を誠と思ひ急ぎ御殿へ馳歸て云々と注進せしが奥方は平素物に騒ぬ性質なればさして驚き給ふ氣色もなく下郎は口の善惡なきもの故渠が言は容易よ受られぬと自ら告しとあるうらははぬのまゝ聞捨にも成難し猶渠を執へて細に吟味するやう表の者へ命令よと應揚の御沙汰ありければ直に表役人に云々の旨言遣ける「九月十日の月高く上りて城渠の水を照し松吹く風の音颯々ど響きていと物凄き夜の景色此處は是松前城内の片隅なる城守廟の境内なりかゝる處へ自地の手拭にて面を包みたる一人の中間前後見廻し歩來り相闘と覺しく眩を二つ三つ四つする間もあらせず廟の扉を内へ開きて露出たる一人の武士頭巾真深に忍びの裝束中間は夫と見るか手拭取て小腰を屈め旦那と一聲高く叫ぶを武士は叱と止め猶傍近く寄寄せ「豫て頼みし彼一儀はと小聲で問へ中間も聲を低めて顔差寄「今日の夕方奥方附の末野に逢てお松の隠跡口に任せて言置たればお松は今頃手當に成り御殿は定て大騒動と語るを聞て武士は「夫は上首尾出かしたく當座の褒美に之

を遣るといふより早く中間の臍腹を一當ツント討り倒るゝ處を起しも立す膝に引曳き中間の三尺外して首に捲附力任せにグツト一掃鼻に手を當一思案何う巧は白紙へ包みし一通取出しソト差入るゝ死骸の懷中其手で引出す胴巻の目を引て袂にをし入れそのまゝ小脇に引抱え傍の松ヶ枝スルゝと攀上りたる身輕の側さ程好き校又釣下て自縊れし体に持成し大地へ飄然と飛下つ月の光に松ヶ枝を振仰向て莞爾一笑「此うして置バ大丈夫と獨合點糊執塵打拂ふて悠然と何處ともなく立去けり傍に繋れる松蔭に身をひそまして此場の様子を始終伺ふ一人の壯士彼武士の迹見送りて始て其場へ身を露はし「殺されたるは中間七助殺せし武士は忍頭巾に面は定かに見ぬねどもゝのこし恰好物のいひさま確に島田彌太郎殿平生に似合ぬ今宵の振舞はか鈴と心を合してお松を退け其上に何うもくろむ渠が結構ハテナト手を組み一思案是も何やら心に合點いづこともなく立去けりソモ此壯士は如何なる者ぞ後に至りて其姓名顯然ならん

○ 第八 編

偕も松前家の表役人は奥より仲間七助吟味の事を托されしを以て直又同人を呼出せしに最

早何處へか逃去て行方の知れねば直に捕吏を四方に走らせ機重に遺述させしに闘らずも城内の城塙廟の森にて松ヶ枝に首を釣てゐたるを見いだし直に役人を出張させて檢視の事を行ひしに其懷中に一通の遺書あり其文体を見れば此度お部家松の方のお依頼に依て若君致丸様殺害の事を侍女おのふより傳へられ夫が爲多くの金子をさへ給り且若君聞入ねバ命をも召さるゝ由嚴き仰もあり恩威兩ら犯しがたく其坐において承諾の旨お答申したれど若君様を失ひまゐらすなど如何でさる畏しき事の爲らるべき然しながら一旦お部屋様に對し承諾せし言もあり殊に多くの賜をさへ戴きたれバ今更中道にて思止る事も成難く恩義の二つを一身に思替へ此は果敢なき最后を遂げ若君様には異心を狹まざる身の潔白を表しお部家様には一旦承諾しながら其事を遂げざる身の怠惰を謝し奉れば若君様にもお部屋様にも下郎が切なき心情を御推察下され罪科御宥免あらんことを又お部家様事世又畏しき巧を企たせへども元々己が孕し服様のお胤を世と立んと思ふ女子の果敢なき心より起りし事にてお胤に變りはなければ成丈穩便の御沙汰あらん事をくれくも願上るになん下郎が最后より事の漏て御恩を蒙りしお部家様に御迷惑相懸候ては死しての後の心残り候など廻ら

ぬ筆ながら最詳く認めありければ誰かは嶋田が奸計も成りたる偽書なりと心附くべき孰も七助が死を恤み松の方の行ひを憎て直に殿の御前へ云々と披露しければ殿に之を聞召して大に怒り給ひ平生飽迄寵愛を掛かきしに猶夫を不足に思ひ致丸を殺害せんとは不埒の振舞屹度紅明中附よと最も隠しき命令なれば直に松の方を部家より引出し侍女おのふと別々に下女の明部家をぞ押込めけり

○ 第九 編

雪も野の美し過ておそろしや下に茨の針をかくせば借もお鈴の方は豫て巧みたる再計略行なれて憎しと思ふお松の方を無實の罪に落しければ心密かに打喜び此上は君の寵愛昔に復り彼人と示し合せたる如く望月の欠たる事なく此世を吾世と炫耀くは目前と思ふ圓星の途はずして塵にはお松の方が此度の罪を眞實と思ひて甚く腹立たせふものから久しく聚れきたまひたる鈴の方の事を思出一夜ふりはねて音信たまひければお鈴の方は爰ぞと思ひ平生の愛想に猶十二分の嬌を添へ心の限り響應しまいらせ 偶 問來ませし喜びを述べ久しく疎かりし恨をかこつなどあらん限りの伎倆をつくして飽迄機嫌を取しかを殿には坐に心を傾

けたまひ是迄心様卑しく嫉妬深き女子よと躡むじたまひしも又捨がたき思を生じつゝ其後夜ごとに通たまふにぞか鈴の方は愈々時を得て飽迄殿の心を攪しが爰に一つの難義といふは殿の寵愛昔日に返りしよりその機嫌を取て春臘に預らばやと侍女下婢下女まで吾を先とか鈴の部家に入入して晝夜人目の繁ければ彌太郎と密會ふは借留文の取遣さへ思ふに任せ亦何か不都合がちなれば夫に又心を傷め何とあして彼人と密會便宜を得る術もがたと例のおふちと示合やがて病氣と披露して垂籠てのみをりしが殿には此と聞召て大に駭き早速侍醫某を遣はして診察させしに豫て言合せたる事なればおふちは某を傍に招き多くの物を贈て云々と頼みしに某も元より口は能く廻る例の辨問醫者のことなれば己が劑を桂皮芍薬の効驗より今服したる黄金一味の効能極て著明しく忽ち其所屬を擲任てか鈴の容休を篤と伺ひ頻に顔に皺を寄せお部家の病症は全く氣鬱より出たる勞に近き疾病なれば閑に廣やかなる處へ居を移し出養生をさせまゐらすより療治の道はなしと殿の御前を程能くいひつくりひければ殿には如何で夫を偽計と知らるべきさはとて直にお鈴の方を御殿より遙か距離れたる別荘へぞ移されける

○ 第十編

池の荷は既に盡て雨をうぐるの蓋なく籬の菊は僅に残て猶霜に傲るの枝ある暮秋の景の寂寞たるも水殿雲廓別に春を置く松前家の別荘過日より病と稱して此處に出養生なす愛妾お鈴の方は例の侍女おふちと示合せ密に情人島田彌太郎を引入て不義の快樂を取る計り憎しと思ふお松の方を首尾好く罪に陥したれど殿のお胤を懐妊せる廉を以て且安産の上ならではとさしての組問もなき様子世の喩にいふ寸善尺魔彼是時目を移す間に万一人が奸計の世に公に成もせば夫こそ互の一大事なる過失のなき中に猶も云々讒言して殿の怒を一層強め彼を殺すが上分別と飽迄悪事を詔合一夜殿のいいでを幸ひおすゝの方はいつはりの涙を袖におさへつゝ傍の文函の紐とくくやがて取出す一通の簡書一人の悪事を云ふまじと今日迄心に占たれど最早川捨のなりがたきお家の大事を如何はせん今朝しも妾の侍女おふちが闖らせ御殿のお廊下にて拾來りし此密書うゝる証據のあるからは篤と吟味を遊心され御用心こそ肝要ならめといひつゝ差出一通を殿には手に取り讀が否や烈火の如く怒たまひ「コリヤ是近臣池澤若太郎よりお松に送りし大事の密書その文を摘で謂ば是迄兩

人密通なし遂に一子をも設けしを吾子と偽りて寵愛を專にする夫のみか其子を往々繼子に立んものと夫が爲興お縁が産たる惣領敦丸を無きものにせんと庭掃除方の仲間七助に命せし事の取て今は囚の身と成しも幸ひ懷孕の故を以て組間の緩なれば此間を窺ひ何どか身の成行を計はんといふ大悪無道憎みても猶あまりあるの二人の結構かく確なる証據の手に入るからは少時も猶豫なりがたし今より直に歸館して若太郎を捕縛兩人突合の上篤と吟味を成し次第に依ては自餘の家來の懲戒に立地に成敗を申附んと俄に供捕ひを命じたまふ折柄館より近従の一人堀内一郎といふ壯士馬を飛せして附來り「只今一大事の起り候へば直に言上の爲走參じて候ふと息つき敢ず言出けるを殿には此と聞召て」ナニ大事の進注なりと時にとりて氣遣はしや一郎を是へと申せとそのまゝ堀内を傍近く召れける

○第十一編

夫の借置爰又裸全き松の方は身に覺なき罪科の解に解れぬ縹緞の細目の耻は受ねども獄屋にひとしき座敷半淵瀨定めぬ明日香川變るを常と云ひながら珠に金を彫蓄し御殿の内起居して錦の蘭紋の衣美酒に佳肴の榮曜榮華事知ぬ昨日に變換三度の食ももつそら

飯湯水飲むさへ規則あり沐浴もされず結髪も許されがたき罪人の流石美人も憔悴枯槁畫圖に似たりと屏の詩人の言し昭君の辛苦る姿も此う計りはと思ひやらるゝ可憐の有様多くの組子に守られて泣も心のまゝならねば人目なき野の蟋蟀夫さへ羨む敢果なき身の上今宵も例の寝られぬまゝ一人熟々物案じ「身に覺なき濡衣の干すに干されぬ此日頃活さず殺さぬ坐敷半罪人扱ひ夫さへあるに小腹の兒をば産落すが否非道の呵責をするとの噂爾ういふ髪目を見ぬ中又寧ろ死とぞ思へども偶宿せし胎兒の然も大切なる殿のお胤開より暗へ去すは最愛し身は惜からねど棄られぬつれなき命を是非もなき夫につけても人心頼みがたなき世とはいへ昨日迄はお部家様と機嫌取々朝夕に部家に詰たる多くの女中此身に成ては只の一人も部屋の外より一言の安否を尋る者もなきに只奇特なは池澤若太郎殿組子の寢息を考へては表窓より問音信必ず短氣を出さずと身を大切に浮雲の晴るゝ時節を待たまへと思と信との二筋道世にも優しきお志願に思ふは彼人のみと心に語ふその折柄表の武者窓ホトくと「若お部家様若太郎めで御座り升火急に申上ねば成ぬ事の在て態々推參いたしました其火急の事といふは別義には候はせ豫て卿を憎む奸人原が益殿に讒言を携へ強てお命



を取る結構ある由或方より漏聞たるまゝ、若さる事のありては一大事故今宵の中に此處をお  
 逃し申さん爲めその覺悟にて罷出て候ふ何彼の事は後にゆるく申し上ぐべければ何は倍  
 置此窓よりおん出あれと豫て用意の銀取出し窓の格子を切放せば畏々ながら松の方身は免  
 む角もお胤は大事免るゝ又は免れんものと帯締直して立上り震へる足元踏しめて池澤に手  
 を取れつゝ忍出んとする折しも此物音を聞附て警固の組子は目を醒し夫儼者よ免すなど十  
 手繰り手に手に握り窓より飛いで打てかゝるを君太郎は物ともせず右に左に投遣蹴倒し  
 松の方をバ小腋に抱込に紛れて一枚に何處とも無逃失身詰頭前に返る却説堀内一郎は殿  
 に向ひて両手を支へ「御注進の旨餘の儀に有す豫て御部家に閉込置れしか部家お松の方先  
 刻何者共知ざる曲者か盗出し警固の組子を切放て何處ともなく逃去て候ふが容易ならざる  
 事なれば夜中を厭はず此は推察仕ると息つき敢す言出るを聞くより殿は顔色變へ「ナニ  
 曲者がお松を盗出せしと聞拵ならぬ一珍事急ぎ返りて詮議を運んソレ作の用意をせよ早  
 くくと追立てやがて館へ歸りたまひぬ

○ 第十二編

徳廣公には下館より歸館ありて直に宿直の諸役人を呼出しお松の方を掠奪つなしたる曲者  
 の來歴を詳しく詮議ありしに其誰なるを詳にせされど今宵多くの藩士の中にて池澤君太郎  
 のみ一人行方の定かならねば恐くは彼者の所業にやと評定や、一決仕けれん徳廣公には此  
 と聞て膝打鳴し夫にて思合する事ありと宵にお鈴の方より受取たる密書を懐中より取出し  
 て諸役人に視し既よかゝる確なる証跡あれバ池澤奴を引執へお松共々屹度糺明申附んと思  
 居しに早くも夫と了りてかゝる振舞及しに疑ひなし主の眼を盗て奸通するさへあるを私  
 生の子を子がいと偽り、剩へ事の取に隙で相携て脱走するなど言語に絶せし不埒なる所  
 業草を分ても詮議せよと憤怨益甚しく八方に人を走らせて追跡せしが更に行方の知ぬバ  
 池澤の家内且お松の方の父親小堀力松その餘兩人の親族をば盡く召出し厳しき詮議を遂  
 しが元より覺ぬなき人々なれば只知ぬといふ一様の答を作すの外更に他辞なきに徳廣公  
 にも殆ど餘持され兩人共見附次第に申出るやう若藏匿ひをく時は同罪たるべき旨厳しく申  
 渡され只密々に兩人の行方を搜索するのみ空く月日を送りけり却説池澤君太郎は松の方  
 を坐敷牢より援出して之を携へ豫て計りし事なれば夜の中に數里を走り人無き山路に分入

て用意の衣裳  
に身を粧ひ尋  
常の武家夫婦  
が旅する姿よ  
化しつゝ道を  
急ぎて其翌日  
の夕方三の戸  
迄いたりしが  
壺の内より外  
は一步も移せ  
し事なきお松  
の方なれば足  
を傷て今寸



歩も移しがたしといふを君太郎の實もど不便に思ひやがて之を脊に負ひ猶も道を急ぎ山寺  
の鐘の初更を告る頃三の戸の近在の青柳村なる或百姓家の門に佇立戸口をホトくと打叩  
き池澤なり川村氏只今彼君のお伴して来りたりこゝ明てたべ明け候へど音ひをまして音信  
れば中より應と答へて一人の武士立出つ門口の戸を叩るが否や人目にかゝらぬ内早疾々と  
そのまゝ奥の一間へ誘ひ松の方を池澤の脊後より仰し參らせ上坐に据て吾佛と恭敬ひ接待  
くそも此武士の如何なる者を次々を祝て知るべし

○ 第十三編

當下那の武士のお松の方に向ひて恭しく「拙者は是なる池澤若太郎と同勤を爲す川村藤次  
郎と申す者去る九月十日の夜御城内なる城垣廟において闘らずもお側用人島田彌太郎に  
能背寄たる曲者がお庭掃除方の中間七助を縊殺し傍の松枝に釣下て自縊し体に持成して  
立去るを確と見認是には何を仔細のある事ならんと思居りしに其夜の内に那の七助が懐中  
なしたる遺書より事起てお部家様には俄に押籠の身と成り給ひしと承り情こそ彌太郎奴  
容易ならざる事を企立居るに相違なし昨夜の始末を言上してお部家の無實を辨解まいらせ

んど心は矢竹に早りしうど又退て勘考爲すに君公のお氣に入にて威權は遙に御家老の上  
 にある當時日の出の嶋田なるに只其事を垣間見しといふのみ確實なる証據を押へぬ事を言  
 出て却て島田の爲に言伏られ剩へ夫が爲にお部家の罪を重るやう成行バ世の喩に云ふ愛願  
 の引倒し勞して功なき業なれば夫よりは誰か同志の者を語ひ私に那が動作を探りて十分奸  
 計を發いて呉れんと平生同勤にて然も勿頸の交を爲す計りか忠實の名一藩に喧すしき此池  
 澤ぬしにのみ密に衷情を打明し吾等は態と病氣療養の爲湯治の願を出して先日より城下を  
 離れ些少縁故あるを幸ひ此家に来りて身を潜め他ながら島田の舉動を窺居り又池澤ぬしに  
 は城内に残りて私にお部家の御身の上を守り若刃一の事あらば盗出して此家へお伴しする  
 らする豫ての手筈といひつゝ君太郎を見返バ池澤は少し膝を進め「只今川村の申したる通  
 り我等は城内に留りて密に御身の上を守護しませしに彌太郎にはお鈴の方と示合殿の  
 お胤を宿したる松の方少も早く命を取では大望の妨害なれば何と歟罪に罪を添て殿の怒を  
 加へんものと密に奸計を廻す由風の便りに聞得しまゝ若さる事のありては一大事と存じ此  
 は盗出して此家へお伴申せしなり此處と御城下とは數里の道を隔て殊に他領の事に候へバ

お部家の御身の上にお氣遣ひなけれども此上事を欠くは島田の家に入込て渠が隠謀を探るべ  
 き人物なりとひそめきし語ふ折柄合の襖をそろと明て妹お八重の手を引きつ恐し立出  
 る此家の主人總右衛門お松の方と池澤に向ひて懇懇に禮をなじ「私めは是に在しまし川村  
 様の御父上に厚き御恩を受たる六兵衛（因にいふ六兵衛若年の時松前領分の百姓某と争  
 ひて遂に某を殺し下死人に取らるべき處を藤次郎の父藤右衛門其頃重役を勤めをり夫が扱  
 ひにて下死人を免れたる思あるなり」と申す者の悴にて候が川村様の御身に事も在バ父が  
 御恩の万分之一をも報ひたき豫ての所願夫故今度のお宿をも致す譯只今那處まで承はれバ島  
 田とやらへ入込で隠謀の實否を探る人に事を欠くとの御相談是なる妹は兄の口よりいふも  
 異なるものながら草深き處に成長はすれども幸ひ姿色も十人並殊に性質も我等よりは遙に立  
 優て伶俐ければ是をその問者どやらにお使ひなされては如何男をお使ひなされるよりは却  
 て敵が心を許して大事の事をも漏す道理といふその言の後につきてお八重は言も温和よ  
 「迎もお役には立まじけれと妾の身にて成る程の事は命に掛ても仕途べけれバ情願の職  
 務を仰せつけられてよと云ふに藤次郎は横手を打ち「負た子又習ふて淺瀬を渡るとやら兩

人好い處に氣がつきたりといひつゝ松の方と池澤に向ひ「この八重と申す者女でこそあれ  
極て氣性確なる者よ候へばお心置なく此職務を仰附られ下さるやうと言出ししかば兩人は元  
より否やのいふべきなくさはとて事立地に定りければ頼て惣右衛門は八重を連れて福山に  
趣き知邊の者に周旋を頼みて首尾好く妹を島田の邸へ住込せける

○第十四編

惣右衛門の妹お八重は首尾好く島田へ住込て情願彌太郎の隠謀を見顯さんものと態ど眞實  
々々しく立働り頻りに其心を攪しかど島田も元來黠人も容易く密事を漏すべくもわらぬ  
バ仇に心を惱すのみ空く月日を送りけり此て其年も暮れ明れば慶應二年の春を迎へ宮殿も  
茅屋も程々に年を寄くその中に島田彌太郎は愛妾お鈴の方の執成にして日増し殿の用  
目出度く政道の理非家臣の黜陟總て自己が掌中に握り威權一藩に赫々として遙に家老の  
上にあれバ諸士の尊敬大方ならず凡そ殿の御殿へ年賀に出る程の者は盡く島田の邸に立寄  
て年賀を迎る程なるにぞ此世を吾世と我意を振ひ己に諮談ふ者は登用る己に抵抗ふ者は放  
逐れバ自と奸邪の小人のみ路に當りて一國の政道日に苛虐に趣けども殿には鈴の方の長舌

に説教はされて更に正体なく何事も彌太郎にのみ委任て自己はお鈴の方が出養生なぞ下館  
にのみ流連して只管淫酒に明し暮し三日の賀儀をさへ受けざる程なれを心ある家臣は陰に  
之を憂うれども流石に命惜くやあるらん彌太郎が威權に恐怖て陽に比干が諫めを爲す者  
もなきを彌太郎は時を得たれと一夜又殿の本館へ歸りたまひしを時として下館へ忍行さ  
お鈴の方と酒酌替つゝ豫ての計略最早七八分行れて一家中大半吾味方に附たれば此上御身  
は妊娠と披露なし當る十月を以て他人の産子を殿のお胤と欺き之を懇に養育程好き時節  
を見計ふて殿を毒殺なし引續て致丸若をも毒殺し御身が子に迹目相續させ儲の上は御身  
は殿の御母公御身の威光を以て登用る吾等を國家老の上に立させたまへさる上は誰憚らず  
愈二人の心任せに國の政治を左右せんと飽事知ぬ女子と小人罪も報も白玉椿つばらも物も  
思はずして己が勝手をのみ打語りやがて臥室に入りたりしが春の夜のいと短くまどろむ間  
もなきに早曉告る鶏の音の聞ゆれば今朝しもなごかなど口吟みつゝ支度そこゝに裏口  
より立出つ吾家の方へ二三町も来りし處へ那方より息を計りに足を早めて来かゝりし一人  
の若黨夫と見るより小腰を屈め「旦那様お留主に大變が起りました故お迎ひかたゝ御注

進にと半分開て嶋田は吃驚「大變とは氣遣はしやといひつゝ四方を見廻してその若黨を近く呼寄せ耳さしのべして一部始終篤と聞取顔打繼め「ナニ妻かたみが自害せして一言ひて誅手を組み暫時思案に立盡しぬ

○第十五編

却説鳥田彌太郎の妻かたみは同藩士にて物頭の家格なる安井某の娘にて筆道讀書の業を始め裁縫香花茶湯歌俳諧の道は更なり細の扱きやう長刀の使ひ様をも粗心得性質極て伶俐一藩の賞物なり又かたみの侍女か菊といふは幼少の時よりかたみに仕へ年齢もかたみと相似て實意厚き者なればかたみは姉妹の思ひを爲し此家へ嫁ぐにも侍女にとて連れ来りしあり間詰休題彌太郎は妻か民が自殺の通知を得て急ぎ我家に歸て見れば無慘やか民は居間の中央に懷劍にて咽喉を見事に掻切うつ伏しに倒てをり前に一通の書置を置たれば何事を認めあると急ぎ封押切て讀下せば如何に聞知けんか鈴の方と密通の始末を始めか松の方を冤罪に陥れし事且此上か鈴の方と示令せて尙隠謀を逞ふする念慮ある事を遂一に認め是迄か身持に就て夫となくか諫め申せども更にか聞入なきのみり却て日に月に増長するのみ

なれば夫婦の私情を以てか家の大事を傍觀する道はあらじと決心して今日卿の悪事を委細に認め老後直助に持せて江戸邸の家老職渡邊隼人殿（因に云ふかたみ良人の悪事を近き里方安井に漏さずして却て遠き江戸家老に訴るは兄の某を始め一藩の諸士十の七八彌太郎も味方すれば容易く己が志の貫徹せざるを慮られバ也）迄訴訟せり父は子の爲に隠すといふ聖人の訓誡を背き所天の惡を世に公にするは婦の道に違ひたるやうなれど貞の道より忠の道は重く忠の中に貞の意は自ら籠りをるにや心得候まゝかゝる斷然の事に及びぬさる代り妾一命を捨て卿に背きたる罪を謝すれを忠義を志すの外他意なき旨御憐察あらん事を希ひ侍る且妾より此く訴訟するからは所天の罪を滅等され一命のみは御助け下さるやう作人殿迄細々願置たれば定て御身に恙はあらず此後御心を改て飽迄服へ忠義をつくし是迄の不忠不義を償ひたまへなど心の丈をこまゝと認めあり彌太郎は始終を讀終るや否や辭と計に怒の顔色「女の入らざる賢明立死を以て諫るなど面當がましき業をするさへあるを所夫の隠謀を訴訟するとは世の喩に云ふ女伶俐ふて牛賣損ふどやら憎き阿魔奴と云ふより早くかたみの死骸を堂と蹴る途炭に倒るゝ屏風と共に轉出たる侍女か菊彌太郎の袂に確と纏

り「忠と貞との二筋を只一筋に思詰る御自害召れた奥様に不便の者よと只一言の優いお言も懸給はず立蹴にするとは御道徳など涙ながらに云ふ顔を島田は屹度見下して心に合點聲荒げ「己れはお民が氣に入の侍女お菊此場に差出て物言ふは到底お民と同腹中吾に仇なす毒虫奴と云ひも果さず一刀引抜閃かす間もアラ無慚や首は前にぞ落しけり折柄襖間引明て走出たる腰元お八重用意の延紙兩手もち島田が提たる刀の鏢もと確と押て血を拭ひぬ

○ 第十六編

借も彌太郎は世にも稀なる好色家なれば豫て侍女お八重が百刻の娘には珍らしき姿色氣象ども人に優れたるを深く愛で、密に想ひを懸け一枝手折やと漫に心を動せしが妻のおたみが前を憚りて夫とも言出しかねてをりしを白刃を恐れず拭ひたる此場の働き女子に似合ぬ丈夫の魂に、愈、想ひを増しつゝ、刀を鞘に納めし顔色「コレお八重此彌太郎平生其方の色香と性質を愛をりしが今の丈夫の魂に、愈、以て想を増したり其方の知る通り妻は果敢なき最後に遂げ不斷何彼と口喧嘩さお菊は心柄なる死を爲したれば今は離憚る者もなし今宵より予が心に随ふて宿の妻になれかし應と云べ氏無ふして乘る玉の興榮囉榮華は心のまゝ、

若否と云々此場の様子を知つたる其方お菊同様に生てはかゝぬ生死二つの返事をせよと云はれてお八重は心の内今こそ豫ての望を達し渠が悪事を見顯す時こそ來れと思へども態と色にもいださずして最愧かしげに俯首しべし答も梨の花の雨を帯たる風情にて疊の塵を拈りをりしがやゝありて口を開き「氏も素性も白浪の寄する濱邊に世を送る海人の子にさへ劣りたる賤しき妾になよ竹の世にわりがたき今の仰せ夫が眞實にあるならば過去たまひし奥様にはいとおやけなき事ながらいかで否やを申すべき田舎成長と侮りて愚弄たまふに非ずやと昵にして島田の顔をじつと凝視する美艶さ久米の山人も爲に通を失んばかりなれば彌太郎は心どさめき矢庭にお八重の手を執て呌みし目尻を俄に下げ「此計り最愛く思ふ其方を欺して何とせん若夫とても疑ふならば彼處へ行て予が心の眞實の程を打明にいざとばりに引立て閨に入んとする處へ次に扣へて先刻より様子を窺ふ若黨交藏溜兼てや進出島田の裾をバ節と執へ「モシ旦那様奥様の御自害お菊の横死加之一層直助奴は厚様の密旨を承て江戸表へ出立なしたる此場の大變夫をそのまゝ捨置てお八重を執へて狼麩の振舞平生に似合ぬ虚氣の極不時の騒ぎにお心亂れ前後を失ひたまひしかと眞顔に成て問詰たる

當下彌太郎は眞顔に饒る文藏に向ひて冷笑ひ「此場の變事に心亂れ度を失ひし歟とは無禮の問言平素の望の邪魔になる彼お民何日か手に掛け打果さんと豫て覺悟を仕てをりしに自殺なせしは物希の幸ひ然し此儘にして届出なば其筋の疑惑里方の故障彼是面倒もあらんかと些少心を苦る處へ飛で火に入る夏虫の火虫に齊しき侍女お菊此場に來りて入らざる怨言夫を機會に首打落せし趣向は世に云ふ一舉兩得一つにはお菊は元よりお民が腹心今夜の様子を里方へ密に知すは必定なれば迎も生ては置れぬ奴又二つには死人に口なし何か餘義なき意恨の有しか但は渠めは發狂なせしか夜半にお民の寢込を刺したるその物音に目を覺して驅附其場を去らせず矢庭に首を打落しぬとお民が自殺を渠が仕業と程好く言成し披露致さば疑惑も故障も兩ら起らぬ計の今宵の始末は吾と其方と爰に居る可愛いお八重の三人より他に知る者絶て無れば世間に洩るゝの憂ひはなし此う迄計りし此場の掛引此ても彌太郎虚氣なるかと言遠しく言出るに悪事に抜目内外に能く行届し氣轉を感じ文藏はひたすら恐入り「流石御主人は御主人丈夫晴妙計感服至極只今の過言は眞平御用捨此場の始末

は夫にて好れど只心に懸るは直助の注進彼を如何なされますと半分謂はさず彌太郎は少し其方に膝押進め「夫も元より思案あり渠が退手を甲乙と今更人を撰まんより其方今より出立なし通駕籠にて述追馳途中に於て殺害せ高の知たる下郎の老奴夜を日に續で走るとも未遠くは得こそ往くまじ殊に太刀抜く術も知らぬ傍方附るには手も入るまじされども油断は大敵なれば能く心して遣おはせよと云ひつゝお八重に願將て知せ傍の手箱を取寄て一包の金取出しお菊を殺せし腰刀も添て岡田に卒と渡し「金は手當よ一刀は常坐の褒美よ遣はす程に必脱るな急いで行けど言ば文藏恭く該二品を兩手に受け金は懐中刀は腰にハット計りに立上り「此一刀にて直助の首をば見事に打落し彼奥様の密書と共に引提げ歸るは瞬息間必御配慮御無用と左も潔く言捨て表を指てぞ走行く後姿を見送て彌太郎は莞爾笑ひお八重と顔を見合せて「此うして置ば且何も彼も氣遣ひなく萬事は夜明て後の事未夫迄に間もあれは姑く闇中にて互の眞實幾千代掛けて變らざる心の丈の丈くらべ卒と計りに手を取られお八重はハット思へども今更いなども岩見瀾深き思ひは色系の色にも出さで線系のひかるまゝに伴はれぬ

借も鳥田彌太郎は翌朝書状を以て昨夜の始末云々と豫て計し如く昨夜々半侍女お菊が意趣  
 か發狂かお民を切害せし其物音に驚醒て其座を去せず手打にせし旨を順序能く届出しが家  
 老達は如何で嶋田が偽計とは思慮るべき殊又平生威權強き者なれば誰とて免や此う云ふ者  
 なく直に役人を出張させて兩人の死骸を檢視させ事故なく納りしかばお民の里方安井にて  
 もお民は平生人に勝れて情厚き者殊にお菊とは姉妹の親睦を爲す交際なれば怨を受るやう  
 なる非道の呵責を爲す道理なく又お菊も親みのあまりお八重より些少は無理なる事を言は  
 るゝ事あるも夫を怨みて刃を用ひるに至るなど思ひも依ぬ事はおは何歟仔細のある事なら  
 んど密に疑念は抱くものうら既に其筋の檢視も首尾能くすみし上からは今更免や角いふべ  
 き詞もなく且は兄光之助は彌太郎と無二の交際なれば強て故障もなきにぞ彌太郎と安心し  
 て葬式をすませ其後は表向は妻の喪に籠ると披露して内々は己が徒黨を喚集へ頻に悪事を  
 語ひ合ふは無慚といふもあまりあり此てお八重は色に附托して彌太郎が隠謀を探らんもの  
 と陽は彼が心に従ふやうにもてなせどもとより肌身を許す心なれば聞説く人の靈魂は

七々日の間其家  
 の軒端を離れず  
 どかいふものを  
 未奥様の三十五  
 日さへ立ざるに  
 枕を併べ参らす  
 るは如何にも快  
 からざる事なれ  
 ば切て四十九日  
 の法筵を果る迄慎み給へなど程  
 好く言成して彌太郎が如何に言  
 追れども其意に従はずされども  
 衣食刃端何呉の世話介抱はお民





がわりし日の取扱ひよりは猶彌増して世の噂云ふ瘁い處に手が届く迄能く行届かせておくまで眞實を見するにぞ流石の島田も更も疑ふ心なく八重々々と女房同様の親睦を爲せば尙も此に角機密を探りつやがて彌太郎が悪事の始末を逐一に書認め三の戸なる兄の許へ報知せんものと日夜其隙を窺へども島田も黙然油断なく朝夕傍に引附て寸時も離さぬ中々心に任せぬを強て些少の暇を盗み一行二行づゝ書綴て漸く事の概略のみを認め自己を此家へ周旋せし假親出入の呉服商福島屋安八といふ者に少し餘議なき仔細あれを急に親許へ届けくれよと篤く頼みて手渡したる其又の恙なく兄の手に入て川村池澤の二忠臣が嶋田の奸を許く證據に成るや否やの後條に説分べし

○ 第十九編

夫は借宿爰に又か松の方池澤川村の三人の戸なる百姓惣右衛門方に身を潜めお八重の便りを今日か明日かと待間に何時か月日の移て頓て其年も暮れ翌は慶應二年の春をを迎へける陸奥の習ひ殊に名に負ふ山家のことなれば道もなき途雪の降滿て笠の音さへ未春を知らせ初ねど流石に世にある人の松竹營立被服着飾つゝ自じう程々年を壽く儀式行ふを此主

従い日蔭の身殊に主家の安危に胸を傷るものうら正月を祝ふ必もなくか松の方の最早臨月に間もなければ就中心苦しくて家長惣右衛門を言敵に君も君臣も臣てふ世なりせばよめりし道濫り述懐の歌など言出つゝ涙のつらゝ解る間もなく昔の袖の沾りがちにて暮せしが頓て正月も過二月もやゝ中旬過る頃か松の方の愈々身重に成て最早今日か明日かと思はるゝ迄なりたれば卒といふ日に男手のみにてい事を關く(戸主惣右衛門の未無妻なり)故産母を兼て何かの周旋をする老女もがなと其人を求めしに幸ひ川一つ隔てたる二の戸村にお鹿といふ老女ありてかゝる事は物慣れたれば或人の勤るに任せ其老女を雇ひしに年は六十あまりにて容貌凶悪なれど起居言語最優しく万事に抜目なく立働人は見掛に寄ぬものにてそなど言合りしが同月廿五日の曉か松の方にはいと安らかに産の紐を解き然も玉の如き男子を産落し産後の苦悶さへもなければ之を切ても喜びにしゝぬ日もあるべきに菅原の大神の御縁日に成出たまふ和子なれば行末の程もいと頼母子大神の愛たまひし縁故もあれ心とて其名をバ梅丸と名づけつ主従が掌中の玉簪上の花と恭ひ侍養ける儲もお鹿婆々は松の方の介抱家内の周旋など何異と働さをりしがこのお鹿表面は優く見すれども内心は

極て凶悪者なれば池澤川村の兩人がお松の方をお部家々々と恭ひお松の方の又己が生の子を和子様々々と傳く様子の只ならぬに密に疑念を抱きかゝる田舎の百刻家にかゝる人々の世を忍びをるは何う深き仔細あるに相違なし事に依りなば黄金の夢と何彼に心を用ひて尙も主従の様子を窺ふに如何にも仔細ありげなるにぞ一日事に托へて吾家に歸り豫て懸念にせる目明し金次と云ふ者よ云々と告しに金次の此と聞くより満面に笑を含みそは好物をこを見附出したれ少も早く代官所へ訴へて渠等を捕縛素生を篤と吟味せんとお鹿を引連をのまゝに代官所へと走去けり

○ 第二十篇

お鹿老女がさる奸計を爲さんとの少も如す君太郎藤次郎惣右衛門の三人の一間の中に頭を築め池澤川村の二人の惣右衛門に打向ひ此程より相談せんと思ひ去がお鹿婆々に妨げられて今日迄黙止てをりぬ情をの相談といふの別義に非ず其方の妹お八重より去年以來今に於て何等の音信もなければ少も本藩の様子の分らねど益々島田が威權を專に仕てをるに相違のあらじ池澤の元より日蔭の身川村も亦湯治と披露して本藩をいでしまゝ身を藏したれば

兩人とも城下に歸りて摸様を探索するに山なし幸ひ松の方にも安産せられ御親子共恙なけれバ此上の二人に一人江戸表にいで忠直の聞えある江戸家老渡邊隼人殿に就て島田の奸曲を告訴するより道いなしと精決心せるが此義如何と言出れば惣右衛門の横手を發當と打ちか二人共此しておとさんの如何にも計略なき者に似たれば其御思案極て然るべし吾等の愚案には池澤ぬしには松の方を盗出せし罪を以て松前公より詮義厳しく此地の代官へも人相書を廻して捕縛を依頼されしなどいふ噂もわれを一時此地を遊らるゝは一つには御身の爲にもあるべけれバ此度のお役は池澤ぬしこそ然るべけれといふに兩人も其意に同じやがて三人打揃ふて云々の旨を告て免許を受け池澤は松の方の介抱本藩の動靜を探ることなど川村と惣右衛門に懇に頼みおとさん其翌朝未明に首途して江戸を指てぞ立去ける其夜の初夜過る頃惣右衛門は松の方の居間に在て四方山の話に心を慰めてをり川村は入口の坐敷に一人燈を掲げ兵書に眼を晒してゐる折柄お鹿婆々を案内に連數多の紐子を引卒て恐來りし處の代官此家の前後を圍繞てお鹿婆々を傍へ呼寄耳に口當叫けお鹿は莞爾打合點一人進で門に身を寄せ入口ホトゝ音信て「ハイお鹿で傍坐り升只今返りました懼りながら此處明てど

いふ聲出て川村は應と答へて立上り「おしかぬしか早かりしと雨戸の掛金外せしが世を忍ぶ身の油断なく若やと思へば身構なしつ、一寸計引明て表の様子を覗き見れば果して數多の組子等が手にく十手身を沈まし卒といはゞ打てかゝらん身構なして扣へるにぞハット驚きそのまゝに再度雨戸をハタと立切一息ホツと突にけり

○ 第二十一 編

所の代官中山左内は表に有て聲高に「松前藩池澤若太郎と云る者松の方と謂る殿の妾を盗て運去たれば見認次第捕縛くるゝやうと吾等に内縁ある同藩士當時第一の権臣と仰がるゝ島田彌太郎より内々頼來りたれば若領分に潜居る事もやと私に手を廻して詮議せる折柄當家の雇人か鹿婆々より此屋に怪しき主従を藏匿ある由訴人せし故猶探偵の手をつくせしむ全くお松の方池澤主従に紛れなきこと分明なれば此は捕縛に向ふたり最早免れぬ處なれば池澤お松と名を名乗て潔く繩を受よと叫びたり内なる川村は儲はか鹿婆々の訴訟に依て中山奴が捕手に向ふたるう渠は聞ゆる酷更なるに島田に内縁あると云ふからは迎も見免す氣遣はあらじさはさりながら死は易く生は難し殊に大切なるお部家利子様を抱へたれば免る

又は免れて見んと後鉢巻尻端折襟を十字に繰取つゝ表に向つて穩に「如何にも當家に婦人は居れども小生の女房にて小生は秋田藩の浪人紅林常吉といふ者此家に池澤又はお松の方などいふ者は居り候はずと言せも果す中山の呵々ど打笑ひ「盜賊猛々しいとは汝が事如何程僞陳するとも此く確なる証人のあるからは用捨はせじ此上最早言論無用なりソレ者共雨戸躍破て引摺出せと云ふより早く組子の面々雨戸滅離々々引破御説々々の聲諸共十手打振打てかゝるを待設けたる藤次郎心得たりと立向ひ取ては投除け踏飛し向ふに前なき勇士の働き組子は是に遭易して表へハット引退く代官左内は聲喚らし「一人の相手に逆るとは平素に似合ぬ卑怯の振舞命を惜ず働けと喚と叫べど尻込して一人も應ずる者なければ左内は今溜兼腰なる一刀さらりと引抜き池澤覺悟と聲拵て川村目懸て切てかゝる藤次郎も是迄と飛退つて抜合庭の這入の中央にて爰を先途と切結びぬ夫は儲置惣右衛門はお松の方の部家に在て江湖雜談を仕てをる折から俄に表の騒しければスハ何事と聞耳立れば代官中山と川村の間答遂に切合となりしかバコハ大變と身繕ひ用意の一刀腰に手挟み路銀を腰に着る間もなく若若小腕に引抱へコハ何とせん悲しやと驚き嘆く松の方又袂端折せて手を揚へ

三十六計遊るに如すと世の謎にもいふものを幸させ給へといひつゝも着戸の掛金引外し表へ立出る間もあらせす夕顔棚の彼方より露出たる細子四五名くあるべしと「豫て知る蜘蛛の振舞夫ならぬと出口々々に綱を張り蟻の這出る透間も無れば免れぬとこそと觀念してお松を渡して縄かゝれとドス聲高く罵りつゝ手にく十手振舞し御座々々と請寄たり

○ 第二十二編

皆も惣右衛門のお松の方を作ふて裏口より逃出せしが袋にも捕手の待伏ありて前後を圍繞折て掛れば今の基迄なりと覺悟しつ抱へし和子を松の方に渡して己が後に圍ひ用意の一刀抜放し「百姓ながらも惣右衛門太刀抜く術の心得たり輕蔑て後悔すなど多勢を恐れぬ必死の働さ右に打込左に支へ爰を先途と戦ひしが寡は元より以て衆に敵す可らず殊に武藝の達人と云にもあらず剩へ背後に圍ふたる松の方の兎に角心に懸ればやゝとみすれば請太刀に成り最も危く見えたりけり松の方の惣右衛門の細子を見てコソ叫のほど思ひながらも逃去る術も知らざれば和子を抱へて迂路つく處へ夫と目を附け一人の細手飛鳥の如く馳來り矢庭に和子を引放す引放されて松の方のアレーと一聲叫びしが此聲聞附け惣右衛門スハお部

家様に事ありと思はず背後を振向く塗炭透を附込捕手の小頭肩先一太刀切込たり此時早し彼時遅し此方に響へし松の蔭より突と出たる一人の曲者白地の手拭頬冠夜目への夫と白波の但し博徒か荒くれ男お松の方をバ小脇に抱込夫遣てはと追絶る細手を立蹴り堂と蹴倒し山手の方へと一散走方知す成り成り倍も川村藤次郎は表に在て代官中山左内と受つ流しつ戦ひしが元來劍法熟達の藤次郎左内がいらつて打込一刀を閃然と受流そが否や直に一足踏込大袈裟に切放し裏口より立出たまひしお部家お子様の御身の上を氣遣しけれと裏手を指して韋駄天走り血刀提げ駈附見一人の細子が和子を抱てゐるにぞ南無三寶と踊懸り矢庭に之を奪返す其勢ひに併易して其餘の細子は七離八分後をも見ずして逃去たりお松の方は何處ぞと和子を抱いて其處等邊を月の光に見渡せば傍に人の倒るゝあり若やと近寄扶起せばお松の方には非ずして家主惣右衛門の死骸なるにぞ若蘇生る事もやと様々に慰りしが數少所の深手に迎も介抱行届くべくもあられぬバ切て死骸を藏してやらめと思ひながら兎角する間に時を移さばお部家の行方を尋るに暇なし加之逃去たる細子の再度盛返し來らんも免倒なり諺に云ふ大事の前の小事なれば死骸を埋るを後にしてお部家を尋るを先に

するを上分別と漸くに心を決し死骸に向て念佛三遍を唱へ啼むづかる和子をいすぶりながら立去んとする後の方より覗ひよつたる一人の武士物をも謂す藤次郎の刀の小尻を無手と取り二足三足引返しぬ

○第二十三編

却説川村藤次郎は百如惣右衛門が身分に似氣なく義の爲に一命を棄たるを如何にも不便と思ふものから死骸に向て念佛を唱へ泣入る和子を揺動つゝ今いや去立んとする其折柄背後の方より物をも謂す刀の小尻を取る者あり其形相如何にぞなれば黒紋附の衣裳の裾を七分三分に高く掲げ朱鞘の大小を落指しに指し水色の手巾よて深く面を包みたる様子の喜か悪かは知ねども一僻あるべく見受らる吃驚とはしながら藤次郎元來不敵の猛者なれば少も恐れず其手を拂ふを渠も透さき拂ふ手を確と握て直に附込組んとするを組しも遣らず左手を利せて胸部を一當つれば曲者は思はず後ろへよろゝゝ其間を幸ひ川村は彼方を指して逃行くを逸さじものをと驅寄る曲者「川村待と呼留る聲を目當に早速の手裏劍小柄を飛して一散に逃噴まして立去けり」此處は三の戸の三日町處に名高き松尾定次郎といふ籠旅

屋の表坐敷に座を占て行燈の火にて日記を認め居る一人の客人武家の飛脚と覺しき形相にて年の頃は五十餘なりかゝる處へ表の方俄に物騒しく人の走る音驚る聲の聞ゆれば彼飛脚体の男は耳を傾け急に手を打鳴して宿の亭主を呼び何事にやと尋ねしが問れて亭主は心得顔にさん候此町稍盡處の柳村といふ寒村の百姓惣右衛門と云ふ者の家に松前家の妾お松といふ者と家來の池澤に川村といふ二人の者を藏匿してありしを所の代官中山左内様が開附て只今捕縛に向ふたとやら夫故の騒動にて候といふを聞くより那飛脚は手に持たる筆を投捨し松の方と池澤様をと言掛しが俄に言を改めお松に池澤とやら元より見ず知ずの人達殊に如何なる罪如何なる仔細のあることかは知らねども捕縛の様子が一見したければ今より現場に至て見んと亭主に道程を詳く聞取押取刀にて馳去けりをも此飛脚は何者ぞ是則別人ならず島田彌太郎の女房お民の内意を受けて江戸邸へ趣く老僕直助なり雪の爲に途を阻られて意外に日を費し今日しも漸く此處迄來りしなり此て直助は足を早めて柳村に至りしが最早事すみたる迹なりしか惣右衛門の家の最寄なる某の家に音信て夫となく様子を尋ねしに惣右衛門は其場に命を落したれどお松の方も産れし和子も川村藤次郎も三人

とも恙なく其場を落延たる事のあらまし分りたれば些少安堵の思ひを爲し是につけても一日も早く江戸邸に到り御家老渡邊様に奥様の御状を渡し悪黨原に辛き目見せてくれんと其まゝ松尾方へ取返して翌朝未明三の戸を出立なし降埋む深雪を踏分つゝ盛岡郡山岩崎一の關赤壁の宿々を通越へ翌日の夕方山の内の難所へ差掛りたる折しもあれ遙か背後の方に聲有てチーイ〜と呼留たり

○第二十四編

時しも慶應二年春三月の初旬都は柳櫻を交加てやゝ春の錦織初る頃なるを陸奥のならひとて殘雪野山に充滿て氷れる涙解やらねバ谷の鶯音をのみ啼て未喬木も移る初音を漏さねバ一ツ二ツ綻びかゝりし梅の初花に漸く春を知をめるのみ増て此處は南部街道の難所と聞わたる赤壁と澤部の間宇を山の内といふ山路なるに今日は午後より風の甚く吹荒て又もや雪の降いでたればそりの綱手を曳ぞむづらうと親降刺臣の詠たまひたる歌の様に往來の道の迹も絶たるに笠笠に吹雪を除け藁鞋に雪踏分て急ぎ來かゝる一人の旅人あり背後の方よりチーイ〜と呼留られて足を留め其方を見返る暇も無いさせき逐來る壯士

近づくまゝに顔見合せ互に吃驚油断せず先に來りし侍は逐來し武士に言を掛け「ヤア其方は若黨文藏ならずや是處等邊へ何しに來た」何しに來たとは事可笑しや爾云ふ汝の迹逐掛て夜道を厭ず此處迄來たのだ「ナニ吾迹を逐來りしとシテその用事は何事ぞ」「イヤ別の事ではない汝が所持して居奥様の書狀が貰ひたさに「ナニ奥様のお書狀とは」「エ、空恍惚な論より証據の其狀箱此方へ渡せと延す手を取て彼方へ突飛せば文藏は赫と遮込「此直助の老爺奴が殺すも不便と慈悲心から優く言バ附上り手向ひするとは危怪至極いで此上は用捨はならじ息の根留てその書狀をといふより早く笠籠脱却一刀キヲリと引抜て「老爺覺悟と打て掛るを直助も一生懸命同く笠籠脱却て心得たりと抜合雪を蹴立て一上一下笈を先途と切結ぶ又藏は血氣の壯士直助は五十に近き老人なればやゝともすれを切立られ惣身に薄手四五ヶ所負ひ既に危く見えたる折柄文藏はこゝに運命のつくる處か草鞋の紐を踏切て積もりし雪に足すべらしアナヤと一聲横様に堂と轉倒ぶを起しも立す得たりと直助乗掛り咽喉一突刀を杖ホット一息四邊見廻し「此奴が此處迄遙々と吾等の逐手に向ふを見バ奥様の御身に何か凶事でもありはせぬかハテ心元なき事どもやといひつゝ猶も幾缺り息の根止て刀

を鞘「是につけても片時も早く此御書状を江戸邸の御家老様へ上るが肝心幸ひ手紙も淺  
 手なれば澤部の宿にて手當をせん呼危うかりしと獨語さ簀笠取上麓の方へハヤ立去んと  
 する折しも彼時早し此時遅し一聲の鐵砲筒音高く直助の背中より胸板かけドウトばかりに  
 打抜たり因に云ふ文藏は主人彌太郎の命を受けて直助の迹を逐ひ夜を日に次で急ぐとすれど  
 是も亦雪に阻てられ道抄取らず昨夕三の戸の松尾方まで至り直助と覺しき男の前後止宿せ  
 る由を聞き夫より直に夜を侵して迹を逐ひ漸く爰にて直助に追附しなりその手續さを記さ  
 んも煩はしけれバ摘探て爰に其要を記す

○ 第二十五編

むさ、びはこぬれもどむと足引の山の獵夫に逢にけるかな此處へ麓の方より鐵砲提げ一  
 散に雪を蹴立て駈來る獵夫「確に手答へ此處等邊と四方見廻し直助の死骸を見附て吃驚仰  
 天「ヤ、猪にはあらでコリヤ旅人南無三寶仕損じたり未息あらんと述てふためさ鐵砲傍に  
 投捨つ首に手を掛け引起し呼と叫べと降積る雪より冷て息なけれバ藪やあると懐中に手を  
 さし入るれば手に觸はる金の財布を引いづし首に掛けたる状箱をはづして兩手も兎見彼ら

見「此状箱を明けて見たらば此の人の住所姓名も知れるで有らふが何をいふにも不筆の  
 悲さゝりとして人に尋ぬれば此身の罪をば明す道理見ば今方人でも殺傷たのか身内に數ヶ所  
 の疵を受けた其上に又此玉疵では今更何のやうな介抱仕たどて六日の瀉瀉といひつゝ傍に  
 半身は雪に埋れし文藏の死骸を見認て又吃驚「ヤ、此處にも一人と手に持し状箱財布を鐵  
 砲を投たる傍に放遺て死骸を雪より引出し篤と熟視て打合點「楮は此二人が何か意恨あり  
 て喧嘩を仕出し一人は手を負ひ一人は斃だに相違はない幸ひ此二人の死骸を一所にして雪  
 の中に埋めておけばたとへ後日に夫と顯るゝとも二人相擊で死だで事のそむに極つてある  
 爾じやくと獨語ながら二人の死骸に雪打掛け状箱首に財布は懐中死骸に向つて手を合せ  
 「此金は持て歸つても決して私事には一錢も使はずか前様の追善の爲に僧寺に遺捨仕ます  
 れば此ういふ叢果ない最后を遂るも全く前世の因縁と諦て快く成佛して下され南無阿彌  
 陀佛彌陀佛と最と懇に回向して鐵砲肩に蕭然と元來し道へ二三叩下ればとある松蔭に黒く  
 見ゆるは心の業か如何にも人どおもはるれを思はず悚然と佇立り「チ、又死人か今日とい  
 ふ今日は何故此う度々氣味の悪いものに出逢ふことぞ觸らぬ神に祟りなしといふ事もあれ

見捨て行くのが上分別と二足三足行過しが世の喩云ふ畏いもの見たさ「どはいふもの  
若や旅人が雪に苦惱んでゐるのではあるまいかさうなれば先刻の罪業消滅に命を救てや  
りたいたいのと思かへして畏縮ながら松の根方へ立返りぬ

○ 第二十六 編

登下獵師の恐縮ながら松の根方に來て見れば果して一人の旅人が雪に凍て象絶の有様然も年  
赤三十に足ぬ人品優れし武士なれば一入不便の彌増り傍に流るゝ谷の清水を用意の水飲器  
に汲來腰に提たる印籠より定心丹を取出して旅人の口へ酒ぎ入れコヤ喃々と呼生ればやが  
て旅人は息吹返し四邊を回顧て吾と吾死せるに始て氣の附しか獵師に向ひて慇懃に今日な  
んあがり寒さの烈しければ杜康の勢を借て此山を越さんものと麓の茶店に於て例にきく五  
七碗を傾け十分の酔心地に浮されて降積む雪を憂しども思はず鼻端噴ふく此處迄來かゝり  
しが吹雪に面を打れて益々酔を發し物に蹶て倒れしと思ひしまゝ精神恍惚として更に人事  
を覺せず若卿の援助なくんばこのまゝ凍死すべうりしを實に卿と再生の恩人なりと謝する詞  
の確實なれと猶身体の自由を得ざる様子なれば獵師と猶も氣の毒に思ひ「吾等は此山の麓

なる金森村の獵師權六と申もの此處より吾家まで道程僅か四五町なれば卒たまへ吾等卿を  
脊負て居宅まで連行湯藥は更なり喇でも煎て心計の介抱仕てまゐらせんいざ〜と強て勸  
てその旅人をつつかと春におひの身も壯者に劣らぬ壯健質鐵砲狀箱獲物もろとも首に引掛  
黄昏時暗き足元厭ひなく馴し道とて一散に麓を指て走下りやがて吾居村に至れば女房おど  
くの良人の歸宅の例より遅きを苦に病てや門口に待てをり夫と見るより聲を掛け権六の  
言達しく大事の客人をお伴したれば且櫛の用意をせよといひつゝ旅人を春より下し首よか  
けたる鐵砲狀箱獲物と共にいざと渡せばおどくは應と答へてその品々を受取り一足先に吾  
家へ這入て鐵砲と獲物の例の處へおき狀箱の客人の荷物と心得て奥の一間に持行つ居爐裏  
に櫛さしくべてゐるその間に權六も旅人も足を洗ふて上來り居爐裏の周圍に相對して坐を  
搦へしが旅人は改めて權六とおどくに向ひて再生の恩を謝し「吾等は仔細あつて姓名は名  
乗がたけれど松前藩の何某といふ者此度いざゝの餘儀なき事故ありて江戸向へ罷登る途中  
にて候ふと身の上のあらましを言出たる此旅人は何者なるぞその姓名來歴は次編を閲て詳  
ならん



なり〜に九折なる道たぬて雪に隣の近き山里借も旅の武夫は狐柳權六に助けられて夫が家に至り薬よ劑と懇なる響應に逢て漸く病苦を忘れ精神始て本より復りければ夫婦は向ひて再生の恩を謝し「吾等こと今度主家の一大事の爲に江戸表へ登る途中なるが天某が微忠を乘給ず主人をしてかゝる危急を救はしめ給ふ是に因て之を見れば天道は眞に慶し悪に殃とするの説少も誤らず主人には見ず知すの某が雪に凍るを見捨ずして此く懇篤なる介抱を仕給ふからは平素の行状もさぞ想像れて最難有けれ此未共に尙勤て善事を行ひ給へ必ず餘慶あるべきになど眞實な言出づ權六は胸に釘若や前刻の過失を知て夫となく訓誡らるゝにやと思へば背も汗を流しつゝ女房おどく諸共に「仰眞に理りにて候吾々夫婦も是まで善事をせんは及びがたけれと悪事は得せじと心に盟ひをり侍れと宿世の罪業深重なるにや一人の悴は身持放擲にて今は家にも居ぬ仕宜夫婦は五十を過るまで家に擔石の儲なく日々猪狼を殺生して漸く口を過り果敢なき始末當來の因を以て未來の果を推すとか菩提寺の法談にて聽問せし事の候ひしがかくて生涯を送りなば未來の程も空恐しく候など眞面目お應答し

て居る折しも山寺の鐘鐺々々四つを知するに「晝の勞も定てお寐ぶるべし幸お休み候へ奥の納戸に臥床設け仕おきたりとおどくに案内させて旅の武夫を寢に就せやがて己等夫婦も爐の邊に床を展枕にこそは就にけり此て伴の旅の武夫は翌朝未明に目を覺し主人に逢て昨日の恩を謝せんと思ひしが主人は昨日終日山稼せし勞にや熟睡して未起せ女房おどくのみ爐に火を焚附てをりければ夫に向ひて只管介抱の恵を謝し主人に親く禮を述すして出立なすは失敬なれと折角熟睡したまふを起すも心無き業なれば不本意ながら此儘お暇申すと叮嚀に挨拶し其上何程かの資金を紙に括りて謝禮の印と強て渡しおどくが枕邊に置たる直助の狀箱を自己が荷物に能く背れば未薄暗の手探りに夫と心得肩に打掛片時も早くと先を急げ心足に任せて其處を立去りや東雲近き頃澤邊の宿に至りしが宿の入口なる一軒の茶店今しも表を明しものと覺しく店主の老爺が籠の火を吹起して居ればやがて其處へ立寄恰も大便の足たく成しかば肩に掛たる荷物を傍の床几の上におき後架に走て用を足し元の所へ返りて見ればおきたる荷物の見ぬざるにぞ是は不思議と主人の老爺に問はば後架へ行き給ふ間もなく一人の若者が店へ入來りし故卿の同伴なるべしと心許してをりしが是も同

く後架へ行く風情し今方春戸の方へ立出たり偕て卿の同伴ならずして例の胡麻の蠅にて有しかどいふその店主の口上を武夫は半聞さし南無三寶夫やつてはどそのまゝ春戸より驛出し雪の迹をバ心當に宿を飛で逐て行く

○第二十八編

却説獵師權六は雲の過失と宵に旅の武士に謂れたる訓誡の言の兎に角心にうゝれバ輾轉反側て其夜の八つ過る迄も寝らず夜の明方に至りて漸く睡に就しかバ例になく朝寐して其日の四つ頃昨夜の雪の全く晴て旭日の光窓を透り枕を照すに驚き醒め起出るが否や女房に向ひ昨夜お止め申したる武士はと尋ねしが今朝未明に立立せし由を聞て頻に木意なく思ひ吾等が目覺て居るならば今一日はお止め申し心許の響應なりともせんものを残念なる事を仕てけり悻の權三奴も丁度那お武士の年恰好然も今では松前邊を徘徊して習習し些少の武藝を頼みて武士の真似事を仕てゐるとか風の便りに聞たれば彼人を見るにつけ悻の事の記得されて格別か名殘情う思はるれど最早御立立された迹にて千方いふても返らぬ事と暫時歎息して居たりしがやゝありて不圖心附昨夜女房又預けたる直助の状箱を尋ればお

とくハ彌遮てし而色其状箱とやらハお武士の所有と心得御荷物と一つに納戸へ入ておきたれバ今朝御立立の時間違てお持なされしかもしれずとの返答に彼包ハ昨日仔細わつて吾手に入し物若これを他人の手にわたさバ吾等の一命に關係る大事の一品といひつゝ納戸に取入て其處等を見れば一個の包みあり油紙に包みて八重纏かけたる様子如何にも那状箱と能く似れど全く異物なれば偕ハ那の武士が己が包みと思違へて持行しに疑ひなし若此包に印もぞあると裏表を熟視れど只油紙にて包みたるのみなればやがて上包を引きめくれば中をば白紙にて包みその端に何う認めあり自己ハ無策なる故女房おどくに謂すれば松前藩池澤若太郎所持と書してありといふにぞハツと計りに二度吃驚彼人ハ松前家の忠臣川村藤次郎殿と示合せ忠義の爲に殿の愛妾お松の方を奪ふて國を退立なるを以て奸臣等に嫉まれ只今にては日蔭の身となるのみか却てお譯者に成てゐられるとやら人の噂に聞及びしが偕ハ其事に就て江戸表へ何か注進の次第ありて行るゝ途中よてありしか然ハ定て一大事の書類を入れたるに相違なし是を失ひてハ何かに御不都合なるべきに僅少時刻の遅れたれど迹逐驅て荷物と荷物取替るこそ互の爲なれとやがて彼包を片手に提げ澤邊の宿へと志しいきをハ

かりに走去りぬ

○ 第二十九編

老杉古松森々と朶を重ねて繁茂り、其さへ凄き山神の廟夜の猶更神寂て神燈もなき神殿の椽に  
 ドツサリ大胡座年采若き一人の曲者枯枝集て焚火を燃つ、傍の松に縛ぎたる女に向ひて高  
 調子「カツお松の方どやらお松さんどやら今更幾許許ても號いても此廣い山中に自己より  
 外に聞てはねへから到底涙を出す丈が指といふもの抑己がお前を此處へ迎て來た其魂膽を  
 言て聞せるうら少し長くとも辛抱して聞なせへ己は元よりお前に意趣も意恨もねへうら何  
 も此な野暮な事は仕度くねへのだが朋友の金森權三といふ野郎に頼れて據ろなく一肩入た  
 譯其權三といふ野郎は爰から幾里程遠くもねへ金森村の獵師權六といふ者の倅幼少い時の  
 ら獵師や百刻の業が大嫌で相撲よ劍術よと武張た業が大執心お負に十五の時から酒を飲習  
 ひ賭博を打習ひトツ／＼立派な道樂者に成た處から己が居村にも身を置かねて南部津輕の  
 城下を彷徨き歩き今では松前の城下に居て當時彼家中で殿様より威權の強いといふ評判の  
 嶋田彌太郎様の愛顧に成り那人の隠密同様の身分で名字帯刀を許され頃來此三の戸の町へ



遣て来て吾等達の仲間へ渡りをつけ何でも此近邊に吾藩の妾お松の方といふ者と池澤若太郎といふ近習が忍でゐる等故探出して吾等へ手渡ししてくれろ若事成就するから襖美の金の堂次第未其上に望みどあらば院分士分にも取立てやるからと有平糖で縛られて牡丹餅で打れるやうな美しい話にこいつ福徳の三年目と日夜其處此處徘徊して二人の所在を探て見ると柳村の惣右衛門の家に主従と思はるゝ三人の男女が忍でゐるが如何にも權三のいふ人々に似寄の人品もる今宵密に眷戸へ忍で猶も様子を覗ひしに處の代官中山左内が多くの紐子を引連れて掛手に向ひし混雜最中サアハ染奴に魁されしか残念至極さりながら切てお松の方なりとも引渡つて立退んと松の木蔭に身を忍びて折もあらば狙つてゐるとは知ぬ其方の惣右衛門が多くの紐子に敵しかねて危く見ゆるに心を悩ま透を覗つて逃行く處を紐子の一人が速速馳け抱し赤子を奪取て猶還すがる危急の境合時分の好しと顯田矢庭に其方を引抱へ還來る紐子を蹴倒して愛までやうく逃來り焚火の光も今始て其方の姿を見て吃驚おんな美人の又と無れば權三は止にして生涯吾等が手活の花此う見た處は見すばらしいが鸚鵡の三次といつて此三の戸で少い人にも知れた身何も女房に成たからといふて

愧しい譯もない計か是から松前へ引れて阿音折檻され搦句の果に首を切られるに遙に優しだらう命か惜くば云と罷て此拜殿を玉の床此三次さんを抱てぬろ如何だ〜と諺寄たる此場の段落や如何ならん

○第三十編

鸚鵡の三次の松の方の繩を解き派押へる其手を執へて「ナニも其様に畏がる事はねへ空の松原谷の清水の音をそのまゝ、眼前に琴三味線見ゆる山水の景色が、則屏風の繪空に輝く月星を行燈手燭と思ふて寐れば此田中が取も直さず松前様の奥御殿お平の長芋見たやうなのつべりと仕た殿様お苦味の走つた此三次が身は遙に増しな等爾うして見れば抱れて寐たどて別に不足もねへ理屈だ幾千代あけて變らぬ印此松の根を杖に仕てど無理に其場へ押倒し乗掛る間もあら〜しく雪路分て立出る權三三次の襟首取るより早く大地へ堂と犬子投し「ヤイ三次此女を連れて来てどは頼むだか手込にしるどは頼ぬ等雪に去處で惣右衛門の内へ代官の中山が向ふたと聞た故すぐ其足で駆附て見ればお松も池澤も逃た迹エ、残念など其近處で様子を聞かお松は一個の曲者が小脇に抱へて逃たとの事的然手前の仕事と眺み子分の

八藏に駕籠を言附兼ての手筈の山神廟大方爰と来て見れば眼は違はねども見違たのは手前の根性女の色香は精神を脱して手込に仕た上連巻せうとは今更呆れて物が謂れぬこのまゝ女を渡さばよし否といふなら手は見せぬぞと威せど三次は冷笑ひ「初手は其方に頼れたにもせよ奪ふて来たのは此方の働さ褒美の金さへ貰はぬ氣ならば女は元より此方の隨意抱て寐やうと連巻せうと入ざるお世話だ黙止てけつかれ「エ、爾うぬかせば百年自命を取るから覺悟を仕ろとさりと引抜く刀の下此方も老練家身を替し一刀引抜了る破當月を明りに受つ流しつ暫時戦ひるたりしが權三は元來強者の強者エいと聲掛一足踏込肩先バリと切下る折柄いさせき子分の八藏親方首尾はど半分請はさず「チ、八藏か早かつた三次の野郎め女に迷つて魂が變つた夫故に思はぬ殺生此通といひつゝ倒るゝ三次をバ足下に踏へて止めの一刀シテ「言附た用意の駕籠は「今述からといふ間もなく山駕籠擔いでくる橋夫産後の疲勞の其上に雪から愛目の見つゞけにて今は手足も心に任せず逃る術さへなよ竹の雪に壓るゝ風情にて傍に泣入るお松の方を夫と願にて指令れバ「ナット合點と八藏始め二人の橋夫共々に手取足取駕籠に押込ヤットマカセと擔上る駕籠に引添ひ權三八藏麓をさしてぞ走下りぬ

○第三十一編

却説 惣右衛門の妹お八重は兄が横死を露知ねバ過日頃福島屋の便を借て兄の許へ届けやりたる島田が密事を通知の文のその返事をバ今日明日と指執數へて待暮せど其後絶て音信なければ心私に不審を抱さて若や途中に障害のありしを但は古郷に異變ありしか孰にしても平事ならじと思ひ煩ふ夫計か妾になれどの島田が難題夜に日に嚴しき催促を何日迄否は疑れて果は問者と悟られなんさすれバ命を取るべし夫は元より覺悟なれども此儘死なバ島田が悪計をお部屋を始め池澤川村三人のお方に誰か知すべき隙を覗ひ今一筆報知の密書を認めやりなん夫より密事を島田に知られて命を捨るも忠義の爲と心一つに思案を定めつ相間隙間に一行二行漸く文をバ書認襟拵附たる袷衣の襟を引解夫を繰込みさあらぬ体にて一日のこと彼の假親の福島屋を呼で便宜を頼んものと袷衣に包むである處へ障子引明け一人の男「ハイ今日はと云ふ聲にハットお八重は包を藏し「チ、お前は福島屋の小父御好い處へ来て下された今お前の處へ人を遣ふと思ふてゐた處でござりましたと言バ安八

も打合點「チ、爾うでござりましたか私もお前さんには是非お話申さぬべ成ぬ事があつて今日日は態々参じましたと云ふを聞くよりお八重はハット「私に話さぬべ成ぬ事とは若や古郷に何か異變が「チ、其惣右衛門殿の内の事と言掛て四邊見廻し聲をひそめて膝押進め「風の便で聞た事故未確とした事は分らねども惣右衛門殿は何か容易成ぬ罪人の藏匿ふたことが露れて所の代官の詮議を受け罪人計其逃たどやら又執へられたとやら殺されたとやら私も舊來の馴染故馴染にも成ぬ仕宜殊に今ではお前の假親親類同様の交際にも成てゐる事故幸ひ少し商賣川のあるを兼て明日の朝から立歸に三の戸へ行き惣右衛門殿の安否を尋てくる目的チヨット其事の知せたく夫で態々出て来た譯とは云ふもの、お前にも云ふた通り未確とした話ではない程に決して心配せぬが好いと云れてお八重は愈々駭き儲はお松の方始めお二人を藏匿ふた事が露れて兄さまには其筋のお手に達れしかと思ひながらも若や又とはいふもの、刃に一つ今の話が虚事にて兄様始め三人のお方が猶恙なく在すも知れぬべ無き物に仕て彼品をバこのまゝ、届けて遣ることを好れと身勝りの丈夫の魂御猶も心を落着て「小父御にも知ての通り那の兄上に限り罪人を藏匿ふなど、其様な道ならぬ事を仕らるゝお人

ならねば夫は大方何彼の間違にまそざりながら爾う云ふ人ぞ知すに平生慈悲深いお心から養生の分らぬ人に宿を貸して不測の災難に罹られしも圖られぬを幸ひお厚のありて安否をお尋ね下さるとは此上もなき事に侍りといひつゝ、藏せし包取出し「實は此一品を宿許へ届けて戴きたく夫故お前様をお呼申さうと思ふてゐた處此中には妾の若古したる拾の入て侍るが是を兄上に進せたく懼りながら情願お届けなされて下さるやう申す迄もなき事ながらお歸宅の上は直又安否をお知らせ下さるやうとさうりげ無き様に云いづれど心の中は四苦八苦夫と知らぬべ安八は「オ、お前の言はれる通り兄御に限つてお上の御法に背くやうな人では無れば大方虚説でがな御坐らふ程に決して心配せぬが好い其様なら此包は確に届て進せませすソナテ明日の晩か遅くも明後日迄には屹度吉左右知せる故氣を落着て待てゐなされど挨拶をこゝ包を引提げ立歸行く迹見送ホット一息獨語「今の安八殿の話では兄上は更なり三人のお方のお身の上も憂東なし若も今の話が眞實であるならば妾の辛苦も水の泡此末何と仕たものぞと嘆息後の襖の蔭「オ、其兄の惣右衛門は確に打取た迹の三人の奴原もやがて我手に召取る手筈何と八重肝が潰れたかと云ふは正しく主人の聲あまりの事に仰天

して流石のお八重もエイと訓り其方を叱んで茫然たり

○ 第三十二編

當下彌太郎は驚くお八重を引執へ「最初よりして汝の振舞女に似合ぬ不敵の根性平凡成らずと見受しかば色に事奇心を探るに靡くと見せて靡ぬ様子の如何にも仔細のあり氣なれば猶も起居に氣を附けをりしが今日福島屋と密談私語お尋者のお松を始め池澤川村を藏匿ふのみか所の代官中山左内の細子に抗抵ひ命を落せし柳村なる惣右衛門の妹お八重といふかは確に渠等の問者吾等の内事を通知の爲に遣入込みしに相違あるまじ悪き女め覺悟を成せと首打落す處なれど魚心われバ水心今より心を入替て吾等の詞に随ふならば命を助くる夫計か豫て云ふたる言を違へず今より直に奥様扱ひ命が惜しくバ云と謂へど猶も執念深く言迫るを八重は今は覺悟を定め「如何にも妾は其惣右衛門の妹お八重川村様に受し御恩のあれば其恵に報る爲命を捨て此家へ入込汝が悪事の段々を注進成すべき問者の職務然るに運命拙くして兄上は已に義の爲に命を落せしとあるからは妾一人何日迄此世に在て何かせん假令此身を八裂にせらるゝとも主家に仇爲す悪人たる汝の心に従はんやと此言放すべ

き所なれど命を助け給るのみか奥様迄どの有がたき御意を背くも物態なしと心あり氣の反答を聞くより彌太郎些少面を和げ「全く改心するならば是迄犯せし罪は許さん敵に取て畏ろしき者ならぬバ味方に持て頼氣なし今迄川村の爲につくせし眞情を今より吾等の爲につくせよと執へし其手を些少緩めし透を覗ひ用意の懐劍閃然と引抜飛上り「彌太郎覺悟と突悪る其手を執へて鳥田は睡皆「優く言ば附上り悪戯謔なす大膽女可愛さ餘りて悪さが百倍最上此上は用捨はならじヤア」當吾は居らぬ此女を引縛り庭の櫻に釣上げよと云ふ聲聞くよりハント計り近來當家へ抱へられし金森權三の仲間の一人押田當吾と云ふ若黨豫てお八重に想を懸け口説けと例も辛らかりし意趣を返すは此時と矢庭にお八重を縛上綻初と前裁の櫻の枝に釣上つ鳥田が指令に従ひて傍に有合ふ弓の折右手に提げ立向ひ「旦那の仰せよ従ひて改心すれを直に奥様否といふなら此通りと尻の邊を續打「痛くバ旦那の仰せに從へ命惜しくバ改心せよと打と責れどお八重は動せず「命を捨るは豫ての覺悟云ふ事聴けとは汚はしや三途の川にて兄上の定て吾等を待詫たまはん無益の呵責に暇費んより早々殺せど罵るを椽邊近く立出て齒の上に乗を占つ多葉粉くもらし詠め居たる鳥田は見つゝ聞

つゝも爾兼てや庭に下立當吾が執たる弓の折を奪ふが如く引たくり「此強情阿魔奴が敵の間者ど知りながら猶も命を助る計りの女房に迄もせんといふ人の情愛を他に仕て言たいまゝなる雑言過言左程命の惜しうらず此うして息の根止てくれんと肩腰手足の嫌ひなく力任せの連打しもどの風に縛られし櫻の花の散る計り目も當られぬ風情なりお八重は覺悟定めたれば此でも更に聲さへ立す「大悪人の島田彌太郎迎も殺さば疾く殺せ汝も頼て悪事露れ三尺高き木の空にて逆礫になるは目前其時思知れかしと目に角立て罵るにぞ流石の島田も持餘し此儘殺すも興なければ今宵一夜さ夜露に晒し夜の明方に緩々と弄殺しに仕てくれん夫迄與にて飲明さんに當吾も來れと後に從へ一間にこそは入にけり迹に残りしお八重の命は身をくゝられし櫻の花の夜半の嵐を待つより取果なし

○ 第三十三編

却説 金森權三はお松の方を駕籠に乗て麓を指て下りしが行々心に思ふやう今うら此女を島田の屋敷へ連れて行た處が褒美の金は二十り三十夫より江戸の仙臺へ連れて行て打賣半年一杯で二百兩は確と成る品物何をするのも金次第竈道を轉て其方へ連れて行くのが上分別と

獨合點方向を定め子分の八藏を始め轎夫にも夫々鼻薬を飼て南部海道を江戸に向ひ頻み道を急せて我古郷の金森村の最寄を通れども平素の放蕩親の事をバ思ひも出さず迹に見捨て澤邊に宿り翌朝早く松原驛の人口迄來りし處へ背後の方よりいさせきと宙を飛で馳來し一人の若者權三を見懸て詞を掛け「チ、親方駕籠を釣せて東の方へ尙然品物を賣却に行くのだね情願半口と云ひてへ處だが親方に向つて其様な口はいつてへ事言ねへから何分かお配分を願ひやすといふを聞くより冷笑「ワリヤ吉五郎をういふ手前こそ早朝から齟齬と何か餘程好い仕事と見ゆる此方へ配當を寄來すが好いとされて吉五郎の頭を掻き「好い仕事處か今前の宿で朝飯前の仕事に漸く如此な物を取て來たが迹から逐驅て來るので赤中に何が遣入てゐるか明て見ねへのだ親方の眼で此中の何があるか鑿定をお頼み申しやすと手に提てゐる包を出せバ權三の受取て封を開き中に入れたる書狀の表書見るより眉に皺を寄せ八藏も轎夫も暫く休でくんねへと急に呼留て自分は傍の石に腰を掛け書狀の封をおし切て首尾を讀下し吉五郎に向て小聲に成り「時に吉五郎物は相談だが何と此書狀を己に呉れねへかど此うぱうり言つちやア分るめへのら己が此書狀を貰はなければならねへ仔細を



謂て聞せようそも此書状は松前家のお側用人島田彌太郎様の奥方がお家の大事を江戸家老へ注進の書状是を嶋田の旦那様に上げれば二百位の金には屹度なる品物又此駕籠の中に入れてある品物は手前の鑑定通拾賣に仕ても二百兩には成る婦人是と彼とを一時交易して己は此書状を持って松前へ歸て金にそるから手前は又此婦人を連れて江戸か仙臺へ行って賣却して仕舞へそらすれば合て四百兩よりは屹度なる話夫を山分にすれば一人前二百兩づゝ一舉兩得とは此ういふ仕事ではあるまいかと言ふを聞くより吉五郎は片頬に笑を含み「そう所謂を聞いて見バありがたいその書状外の者なら容易に譲る處ではねへけれど親方の相談といひ殊に交易にする品物のあるからは決して兎や再は言はねへから直に手を打やせうと奇麗な返事に權三も喜び「早速の承知で添けねへと八藏を呼で其事を話し吉五郎と共々駕籠に添て東の方へ遣り權三は那状箱を元の如くに包で首に懸け元來し道へ引返す其時早し此時遅くいさせき驅來る一人の武士己れ盜賊包を返せと權三に向て罵りたる此武士は何者ぞ看客孰も御推量なるべし

○第三十四編

權三を呼止たる旅の武士の是則別人からず那池澤若太郎なり權三が持たる包に目を附け「ウヌ盗賊奴大膽なり其包を返さば好し返さねば手見せぬぞと叱附バ冷笑ひ「ナニ此包を己奴が物だと爾う吐す手前こそ盜賊猛々しい此包の中にある書状を何だと思ふ「謂ふまでもなく大事の書類「只大事の書類と計で分らねへ此中にある書類といふは吾等が旦那島田彌太郎様の奥様の大事な密書「フン嶋田を旦那といふからん汝も敵の一人なるの爾う聞く上は猶渡せぬと夫庭に包に手を掛るをさしせせと争ふ機會封目解て落散る一通渡邊隼人様嶋田氏よりと女文字にて書たる表會見るより池澤二度吃驚「ヤア吾包と思ひの外「人の物なら入ぬ世話「何の兎もあれ敵の文通「敵と吐せば猶渡さぬ「處を此うして「何を小癩など互に手練の柔術の精妙組づ解つ虚々實々餓たる虎の肉を争ふ其有様もかくやと計り雪を蹴立て争ひしが池澤遂に金森を膝に細敷動かさず傍に落散る狀取上げ始め終りを讀下し「コリヤ是島田の妻お民が良人彌太郎の奸惡を諷兼て忠義の爲に一命を捨江戸家老の渡邊氏へ國家の大事を哀訴の書状島田が惡事を許くには是に増したる證據はあらじコリヤ奸物が吾手に入たり是といふも川村と某が微忠の程を天道の感應まし「冥助を垂れ給ふに

疑ひなしアラ難有や忝けなや是然しながらお民殿が忠貞の致す處世にも稀なる義烈の行ひ  
 感ずるに猶餘りあり此書狀の手又入るからは我包は失ふも惜しからじ是より直に江戸表へ  
 と云ふを權三は下にて聞き「其方の都合は好らうがそれ取れては此方の都合がど力任せに  
 跳起るを起しも立す確と踏へ島田の家來といふからは謂すと知し大悪人國家に仇なす敵の  
 片端イテ君太郎が手に懸て此世の引導渡してくれんと腰なる一刀閃然と引抜き片手なぐり  
 に振かぶる途炭の拍子に傍なる松の蔭より聲高く「池澤の旦那様暫くといひつゝ隠れいで  
 たる一人の老人包片手に君太郎の前にドツカト坐を占たり

○第三十五編

呼留られて君太郎は振舞したる刃の手を止め老人の顔打詠め「其方は昨夜宿を借りたる金  
 森村の權六老爺奸悪無頼の此奴の成取何故あつて止め給ふと言違しく問ふ間もなく身を摺  
 寄て權六は權三が腰なる一刀を抜きより早く肌くつろげ腹へスツアと突立てを「コッ何故  
 の生害ぞ物にや狂ひし權六と君太郎は吃驚仰天當の敵なる權三を棄置遊て、馳寄る後は附  
 きて權三もやがて身を起し其方は父さん此有様は何事ぞと右左より介抱するを權六は兎見

此見苦き息をホット突き「若旦那様も倅奴も互に心を落付て今此老爺が言殘す罪障懺悔の  
 一段を事長くとも聞て下され此三四日の大雪に定て獲物の多からんと昨日朝より吾家を立  
 出終日處々を狩慕し足元暗き黄昏時金森峠に來かゝる折しも雪に飼食を求めかねてや麓を  
 指して驅行く猪スワ好獲物ぞごんなれと兼て用意の二つ玉にて手もなく其場に打倒し驅寄  
 見バコハ如何に猪にはあらで旅の武士南無三寶過失しぬと介抱すれど急處の痛手早申切て  
 其甲斐なれば其場に於て腹搔切身の過失を辨解せんと一時の思詰たれども此身を此場に  
 失ひしとて此旅人の蘇生るといふ理もあらねバ夫よりは極樂往生せらるゝやう追善回向を  
 するこそ能れと手前勝手の手前勝手の道理を附けその手荷物最後の紀念と獲物と共に肩に引懸吾家に  
 歸る道次といひつゝ君太郎の顔打詠め「岡す貴卿が雪に惱みて苦み給ふを暫爾と見認め切  
 て此御方をお助け申すか犯せし此身の罪業消滅と頓て吾家へ連歸り心計の介抱看病臥床へ  
 這入て枕に附ども宵に貴卿が話談の序も何心なく言出たまひし勸善懲惡の御意見が胸に  
 浮びて寐られず愈々犯せし罪過を空長しく思ふにつけ倅の事さへ思出しつ吾等がかゝる過  
 失せるも又不孝なる倅を持しも年來營心殺生の報ひならめと通宵心の鬼に身を賣られ夜

の明方に初て睡眠み窓の日光に驚醒て見ば貴卿は疾うに出立然も荷物を取違へ吾等が昨  
 倅持歸りたる那の旅人の紀念の包を持って行れし證據は前貴卿の荷物の置てはわれと吾等  
 は元來無筆の悲さ女房おどくに分附て中を解て讀すれば松前藩池澤君太郎と書してあり借  
 は昨夜の客人は豫て忠義のその爲に世を狹め給ふ由聞及ぶ若旦那にて在せしか知ぬ事とて  
 殘念千万此と知りせば響應方も又お話もありつるものと遺憾の限りなく只夫計りが此  
 包には定て大事の書類が入て有るの相違なければ互まなくては成らぬ品物速逃馳て荷物  
 を取換又其上に久々にて主と家來の名のりをせんと勝手知つたる捷徑より宙を翔りて爰迄  
 來しに一個の荷物を遺るやらじといども争ふ二人の武士一人は貴卿に一人は又家出なした  
 る倅の權三傍よ忍で様子を聞バ忠と不忠の其争ひ果は倅が組敷れ貴卿のお手に掛る場合親  
 に不孝の其上よ惡に加擔の倅の不屈元より言語同斷なれば不孝の子は尙可愛しとやら流石  
 吾子が眼前に首打落さるゝを見るに忍ず一つには昨日犯したるその罪科を償ふ爲め又二つ  
 には吾子の惡事を此身に代て償ふ爲又三つには倅の惡意を死を以て陳めて改心させん爲此  
 は命を棄候ふ憐れ老爺が心を察して助け難なき倅の命を情願お助け下さるやう又倅奴も今

日よりして産變りし心と成り是迄の身の非を改め少は人らしく身を持って老爺の慈悲を仇に  
 せず魁少き母親に方計りなる孝養なせと云ふ言々にはふり落す涙と流るゝ血潮にて四邊  
 の雪をば解しけり

○第三十六編

若太郎の權六が長物語に不審の顔色「是なる權三とやらを倅と云ふは聞えたれど此池澤を  
 若旦那とはと半分謂はさず權六は片手を揚て涙を拭ひ「其御不審と柳九千刃抑此老爺は其  
 往昔貴卿のか宅へ下部の奉公親旦那忠右衛門様の御慈悲を蒙り十五の時から廿五迄十年の  
 間御恩に成が不圖した血氣の過失より貴卿の乳母のおどくと人知す不義を働さ果は身重に  
 までさせしかバ何日までか邸にも身を置兼寧故郷へ連退せんと一夜二人が私語密談毒を喰  
 はハ皿迄もどか手許金を五十兩ソツト忍で盗取やがて故郷の金森村へ手に手を取て逃て行  
 き親旦那より習覺し僅の武藝を便宜にして獵師の稼ぎを世渡る營業親旦那様の御慈悲深  
 く其後何等の御沙汰も無さを夫婦が此上なき辛に思ひ無事に月日を送て居る内是なる權三  
 を設けしが成育に従つて身持悪く果は内にも身をふさ兼脱て出しまゝ便りもなく夫婦は漸



次に寄る年の心細きも彌増れバ漸く昔日の身の非を悟り一人の悴が不孝に出来しも全く池澤の旦那の爵情願舊罪赦免をお願申し且何か折もあらば御恩の刃分一をも報ひんものと松前へ便りのある毎に他ながらお宅の様子を承りしに親旦那には五ヶ年前に目出度御逝去おそばされ近頃風の便りに聞は若旦那にの忠義の爲に殿の妾を連れて走つたこのこと憐れ此山家へお出われかし心の限りお世話申さんものとお婆々ど二人朝夕にその事を言出をりしに今朝聞する包の間違より昨日お助け申せしは貴卿といふを始めて知り夫婦が年月蔭ながら心つくしの甲斐あつて若旦那の御病氣を介抱いたせしそれ計り一夜のお宿を申せしこそ切て二人が幸ひなれ變りし包の取替るは更にも謂す久々にて主従の名乗もし今の御身の上をも承りたくお迹を慕ひて此處迄来り思はずも悴の不埒を見聞し吾身の奮悪昨日の過失且は悴の罪にも代らんと此る最后を遂し次第と始て明す身の履歴若太郎は熟々聞て嘆息し「悴は老爺には豫て父より聞及びたる下部権六にてありしか奮悪を懺悔し昨日の過失を悔ひ且は其子の罪に代りて自殺なすとは身柄に似合ぬ健氣の振舞過て改るに憚らざる奇特の志に愛亡父に代て勘當を免し且赦し難き悴権三の命をも助けくれんと未言終らぬ先刻方父

の自殺に氣を奪はれ許手を組て茫然たりし那権三は何思ひけん脇指引抜き兩肌抜き己に自殺と見えたるを池澤迄て、押し止め「眼前父が自殺を遂げたる其志を仇にして汝も死するは何事ぞといへば権三は頭を掉り「何事ぞとは若旦那お情愛過た御一言親に不孝をつくせし上に知ぬ事とは云ひながら奸悪非道の島田に紐し現在親の主筋なる貴卿に對して手向ひなし夫故親父に自殺送させ如何に人面獸心なればとて此儘長經をらるべきと取れし腕を振放すを池澤猶も確と執へ一段聲を勵して「今いふ言に施りなく心今より先非を改めて吾等に一臂の力を添へ島田の奸を世に鳴し天晴松前家の忠臣と仰れ親の名吾名を現せよさすれバ父の切腹も犬死ならぬ夫のみか此世の母も此上なき幸福如何にくと説諭の言聞くより權三大地に平伏し「此身の過を許されなば今迄つくせし悪事の返報島田が謀叛の一々をお明し申して及すながら今日より忠義に加撥せん親父さまにも某が此改心の際期の思出心閑に成佛せられよと云ふ聲耳に入りながら口に言はれぬ斷末問只嬉氣に黙頭權六苦痛させとど若太郎背後に突立南無阿彌陀佛只一聲に打落す首に縫りて権三は思はずワット泣入けり

〇第三十七編

却説若太郎權三の兩人は互に後來の手筈を語り權三は父の死骸を葬りし後一ト先本國松前に立歸り表は島田又加撥して染が悪事を猶も探りて卒といふ時反忠する覺悟兼ては和子と川村の行方を探る事を擔任又池澤は島田の女房お民の遺書を持って江戸邸へ出るその路次お松の方の在所を尋る目的にて頼て右と左と袂を分ぬ夫は借借爰に又吉五郎八藏の兩人はか食の膳を引せし述にて吉五郎は八藏に向ひ「トキニ八公彼品物を江戸迄持て行く目的知らねへが産後の悩みのその上に彼是の辛勞で餘程弱つて居る様子江戸迄持て行く間も若どんな事でもあつた日には千日に對た産後の百より今の五十とかいふ事もあるうら寧爰で賣却したら如何だと云バ八藏は莞爾一笑「自己もまんざら其處に氣の附かねへのでもねへが貴脚の不簡が分らねへら實は言葉兼て居たのだが彼品物では江戸迄持て行なくつても大體二百兩には成るだらふ爾うすれば路用丈が助るといふ者幸ひ此城下には己の心安い圍戸もあるも今から一走行て話を仕て來やうと立んとするを立せもやらず障子の蔭に聲あつて

「其事ならば他へかいて迄もなく私がお話を致しませうといひつゝ出來る此家の戸主二人に向つて叮嚀に「先刻頂戴したお茶代のお禮を申さうと存じお座敷の前迄來ると中には何か込入たお話聞くとはなしに「承ればお連の女中の身賣の相談幸ひ此方に程好い口のある故失禮を願すお話の腰を折りましたと此うばかりでは分りますまいが實は此いふ理でござります私方のお出入先で此仙臺の町では一と云て二とは下らぬ大分限山田屋宗太郎といふ旦那が頃來奥様に別れて聞淋しさの餘り妾を世話してくれと私への頼み又夫計か出入の某方で二三日前に産れた男の子を貰ふてお養育なさる筈只今「承ればお連の女中は産後とやら其子の乳母を兼帯で妾にお住込なされたら随分お望丈の給金にと成りませうと思ひの外なる耳寄の話に二人は渡りに船得し心地早速主人六右衛門に周旋を頼みお松の方には乳母奉公と偽りて承知させ頼て宗太郎に目見させしに名に負ふ松前一の美人なれば一目見るより心に叶ひ直に二百兩の身の代を渡しけるにぞ二人は其金に引替にお松の方を山田屋に渡し足元の明るき内にと其日の中に仙臺を立松前指て返りける是よりお松の方は宗太郎に身を任すや將其心に從はずして愛目を見るや次編て分解るを見て知ん

○ 第三十八編

借もお松の方が二人の悪徒の爲に身を賣られたる仙臺旅籠町の山田宗太郎といふと是なん  
 松前侯の妾お鈴の方の父なり従來の富限にはあらざりしが娘お鈴を些少の縁故あるを幸ひ  
 松前侯の妾に上げしがその引力より依て松前の産物を賣捌き爲に多くの利潤を得て近來俄に  
 身代を遣へしものなりとか年既に五十を越て宗三郎と云三十に近き倅有と頃來妻のおみつ  
 を失ひしより閨淋しさに耐やらず且は貫子の乳母を兼て借こそお松の方を雇入しなり却説  
 お松の方は二人の悪徒の爲に何處の浦へ連行れ如何なる發目に逢ふ事ぞと路次安き心もな  
 ければ幾度か死んと思ひしが三の戸にて敵手に奪れたる和子の事も氣にかゝれば切てその  
 安否の知るゝ迄は生長經ん若又身を汚すなどの憂ひあらば其時こそは舌を嚙てなりとも自  
 殺せんものと密に覺悟を定めつゝ仙臺迄至りしに圖らずも乳母に身を賣れければその意外  
 の幸ひなるを打喜ひ是ぞ頃來信じまゐらす神佛の擁護にこそ此家に身を寄て暫くの月日  
 を送りなば此處は江戸へ行くの要路なれば川村され池澤され双方かの便宜あらんと心に念  
 じてやがて山田屋へ住込しが岩間らんや乳母は全く附たりにて其實は宗太郎の妾になる約

東殊に宗太郎は奸臣島田と密通して松前家に仇なす毒婦兼ては己の怨敵なるお鈴の親とい  
 ふ事まで聞知りしかば愈以て不快す思ひ病ひに附けてその意に従はず日夜部屋にのみ閉  
 籠り隙もあらば逃出すべく若夫も叶はずを自害せんと其透を窺ひしが宗太郎の既に宗三郎  
 といふ繼子もあり宗三郎は又未三十に足らぬに貫子をするは心得ずと不圖心に疑團を抱き  
 若やお鈴が奸計を助る爲ならずやと思ひしかば一日宗太郎に向ひて例になく嬌を獻じ其仔  
 細を尋ねしに宗太郎はお松の方とは少も心附す又己を厭ふ女ども露知す只産後の惱みの日  
 立かねて身体に加減あしき故姑く吾意に従はぬ事とのみ思ひければ更に疑ふ心もなく吾家  
 には不用の子なれど實は娘お鈴の爲に養ひかくなり其仔細は極て秘密に属する事なれど汝  
 は一生涯を二百金にて買切殊に吾後妻に齊しき者なれば其極意を明すなり實は此うく云  
 くお鈴と島田と語合ひ殿の寵愛を固ふする爲妊娠ならぬを妊娠と欺り來月は最早臨月に  
 當るな以て偽懐胎の馬脚を露はさぬやう實家に返りて出産すると披露してお鈴は近々歸宅  
 する手筈幸ひ出入の某方に來月出産の婦人あれは其子を以ての鈴の子に用る目的ありと有  
 葉有枝を明せしうばお松の方は此と聞て大に驚きかゝる曲事を聞く上は遂て、此家を離れ

又容易に自殺などする處にわらず猶も此家に身を落附てお給めが奸計を十分探り其上にて  
 兎も角もせんと猶も病ひと稱して宗太郎を欺き居りしが一夜のまど雪の降いで、最淋  
 しきに獨燈に打向ひ熱々身の薄命を打かちてをる涙にくる、折しも平生心知りたる  
 下女のおしもんが襖をそろらと明て入來り「只今垣の外に頻に赤子の泣聲のする故若や乘  
 兒かど庭の枝折戸を明て覗て見たれば由緒ある人の流落の果か年の程二十六七で色の白い  
 目鼻立の揃ふた人品の好い好男子が身に之補綴の衣裳を被懷中に赤子を入れて破れた傘を指  
 し一人蕭然と佇立乳の足らぬのを泣むづかる其子を片手に動搖ながら自分も涙よくれてゐ  
 る様子定て連合が産後の惱みで乳が上り夫故貫乳をして歩いてをり今宵は乳を貫兼て困つ  
 てゐるのかと思はれますが貴女は平生より慈悲深い御氣質何と呼入て其子に乳を呑せては  
 かやりなされませぬう左様すれば親子二人が助る理といふを聞くよりお松の方は又思出す  
 和子の事若御運めでたく敵の手に殺されずして今迄此世に在しませば定て足ぬ乳を泣て居  
 らるゝならんに其子も丁度和子と同様世に薄命の生れ性、和子と思ふて乳房の情愛いさゝか  
 和子の身の爲に報ふ便宜に成りなましと胸に思案を定めければ「夫は好い事にお氣がつか

れやした乳貰ひといふものは芝居で仕ても不便なもの幸ひ有餘る此乳なれば呼入て飲して  
 やりませう然し旦那様に知れては悪い程人目にかゝらぬやうびそやかにといへばおしも  
 んは打合點庭下駄履ていそくと枝折戸指て立去けり

○第三十九編

下女のおしもん案内に連れ頼て入來る一人の男肌を抱きし乳兒を片手に押へ破傘を片手  
 に提て蕭然と尋る人の此家の中に在りとも卒や白雪の身に降積の愛事を忠義の爲と凍る夜  
 の寒さと共喰し下駄の齒形に千代が句の二字は踏と武士の矢竹心の一筋道踏かへ  
 さじと前裁の飛石傳ひ歩み來つ椽に腰さへ懸かねて小腰を屈めてゐる風情見るも憐れの様  
 なれど標致さへ品格さへ昔もかしく思はれけりおしもんの報知にお松の方は何心なく立出  
 つ「生憎雪さへ降いで、餘寒も一入嚴しきに其處に爾うして居給ひては無耐がたうおはさ  
 んに遠慮に及ばぬ妾の部家此方へお上りおをせと云ふ聲聞て壯士は漸く椽に腰打懸「お  
 慈悲あるお言に甘へて身の汚穢しきをも顧みづ此は推參仕りぬ法々の身の便宜なきに乳  
 兒抱へて晝夜の苦勞拙者の心を御推察下され最鐵面皮しきお願ひには候へども此後共に少



しづなりお乳をお飲下さるやうと片手を突て首を下ぐればお松の方は猶温順に「夫はさぞうし御難儀妾も一事の子を設けしが仔細あつて人手に渡し今では此家に乳母奉公子のわる者の心の苦勞は誰しも同じ事なれば決して人事とは思はぬ程に是を御縁に此後は毎晩丁度今頃垣根の外迄おいであるやう何はともあれお子さまのさぞや儀じうおはさんにドリヤ一杯飲せてといひつゝ間近く進寄る此方も漸く顔を上げ「左様なられば飲せてやつて下さりませと抱きし乳兒取出しいざと渡すを受取る途炭互に顔を見合せてヤア貴女はお松の方其方は川村藤次郎と言んとせしが傍に居るおまのんの前に憚のせきに紛す言と涙何氣波立胸を押へお松の方は若やと思ひ抱取し子の容貌を見れば影もなく憔悴たれと紛ふ方なき和子なれば飛立程の嬉しさをシツト耐へて乳房を含め思はず確と抱しむる血筋の縁に感じてや和子も乳房に取着てさる嬉しげに飲む風情兩人は態と見て看ぬ振り折から奥に聲高くおまのん「と叫聲におまのんはハイと立て行く其間を幸ひ二人は摺寄貴女も御無事で其方も息災和子様迄も恙なふ此上もなき喜びとする挨拶も言短く互に語る身の上話先お松の方は和子を敵手に奪はれ其身は悪漢三次の手に落り夫より奸臣島田の加擔人吉五郎八藏の

兩人に運られ此際迄來て欺されて此家に妾と賣れし事此家の主人宗太郎はお鈴の親なる事且お鈴の懐妊は偽り且偽兒の支度の事病と稱して幸ひ今日迄身を穢されぬ事迄瀧無く告心藤次郎は聞く事々に或は驚き或は喜び此敵の密事を圖す間出する天の助け全くお部家様の貞節の所感サテ拙者は云々と彼夜圖らず和子を敵手より奪取惣右衛門の忠死を吊ひて立去んとする折柄又もや敵に抑留されしを小柄を投て其場を立退き此ては池澤の身の上も覺束なれば述透驅て力を添へ共々江戸へ登る途中お部家様のお行術をも尋ねんと和子様の御介抱を申しながら此城下迄來るゝりし折柄和子様には此頃お乳の足ぬ處方疴の病を起し給ひ晝夜斷ず泣むづかり口に「憔悴給ふにぞ或旅店に滞留して醫者よ藥と手をつくせと肝心お乳の足らぬ故兎角御保護行届す何歎の入費に賂用を失ひ御覽の如くの果敢なき体裁然るに皇天猶某の微忠を捨玉はず圖らずもお部家様に邂逅且は奸臣の密謀を聞得るとは和子の幸福拙者の喜びお家の爲の一大慶事アラ有難やと喜び折しもおまのんに手燭を照させて主人宗太郎は咳一咳此方をさして出来る氣色に若了られては一大事と和子を手早く懷中に枝折戸指て行く川村吾部家指て入るお松互に残す心と心兎角心のまゝならぬ淨世

のさ中こそ果敢なけれ

○ 第四十編

却説川村藤次郎は圓ら走も尋るお松の方に邂逅ふのみか奸人原の機密をさへ聞得たれば其喜び一方ならざるもお松の方の今の身の上ながら針の筵に座するに異ならねば片時も早く取返す手段もがなと思へども宿賃をだに拂兼て賣鬻したる脇差さへ賣ねば成ぬ仕宜なれば何と思索も迷むづかる和子をすりして立歸しが宿の主は夫と見るより例もあらで最莞爾に圍爐裡の邊に呼迎へ「お頼の脇差の事今宵お泊りの或るお武家を見懸てお話申し中身から粧飾小柄のない事まで逐一云ふと其の武家は直に氣に入り爾ふいう品物ならば随分定價にも買てやるべければお刀と持主に逢いたいと先刻より貴客のお返りを待てじや程に少も早く那のお武家に逢て成丈價を好く賣拂ひ其子の醫藥の手當且は私か内の家賃の滞りも拂ふて下されど欲に抜目のなき指令を川村は軽く受「夫は御周旋刀々添なし只今直におん目又懸り品を御覽に備へんと脇差片手に立上りしがスマク寝る懐中の和子に氣のつきソと取出し傍に有合ふ坐蒲團の上に臥さする假寝の床主の教ゆる奥の一間襖とろりと引明

て御免候へと身を差入脇差傍に坐に附バ此方を振向く一人の武士三十は足らぬ年恰好一僻あるべき面魂先刻宿の主よりお話し申せし賣物の脇差イザ御一覽下されよと藤次郎が差出す刀を兩手に受て中身より粧飾までを篤と見てやがて自己が懐中探り一個の小柄を取出し刀に添て差返し川村氏其小柄にお覽ぬあるべしと云ふに藤次郎吃驚として出せし小柄を手に取上げ見心覺への吾小柄故脇差引附身構へなし「汝此小柄を所持なすうらは先の夜三の戸の柳村にて多くの紐子を切拂ひ和子を援けて去んとする時吾名を呼掛背後より刀の小尻を執へたる那の曲者に紛れなし定て汝も嶋田の同類其折放たる小柄が便宜に爰にて再度邂逅しは最早天命免れぬ處卒尋常に細にかゝれと言尖く詰寄るを那武士はアナヤと押し止め「誠に貴殿の御明察の如く彼夜貴殿を討取んとせしのみか其以前殿の愛妾お松の方の部家に忍びて暗殺せんとし多くの女中に手捕にされてお表へ引渡され其時貴殿に一應の吟味を受たる奸臣島田の同類金森權三と云ふ者なりと此う計りにては愈お怒りを添る道理實は斯うく云々と父の自殺と池澤の慈愛に感じて舊來の邪念を蹴し今は昔の權三ならずと改心の一部始終を物語池澤と別れて松前に立 飯陽は島田の味方と見せ懸け猶も彼が舉

動を探りてゐる處へお松の方の身賣を托したる吉五郎八藏の兩人が立返仙臺の山田屋方へ  
 妾に賣たりと二百兩の身の代を渡せしま、自己が改心の旨を言聞せて二人をも本の善人に  
 立返らせ自己の變りに松前に残して島田の犬に附置其身は松の方の身受の爲二百兩の身  
 代金を懐中して晝夜を懸て此迄來り明日は山田屋に至り身受の懸合をなさんと思ふ折柄主  
 が話の小刀の賣物に小柄のわらぬといふ計の其賣主の様子を聞バ乳兒抱へし浪人なりとい  
 ふに愈々心動き若や尋る川村氏かとその賣買に事寄て様子を聞バ似寄の人物即ち小柄を便  
 宜な名乗逢たりといふ迄事落もなく物語ハ川村は始て疑念を晴し其過て改るに憚らざ  
 る心の潔さを賞賛しそは何寄の都合實は云々なりと今宵圖らずお松の方に逢ひまゐらせ  
 然も敵の密事を聞出したる事且はお松の方の身受に心を苦めをりし事迄委細に告げ互に便  
 宜を喜合ふ處へ問屋場役人が表へ入來明日の晩は松前様の江戸家老が此城下へお宿りに  
 なるがお前の家はお定宿の内の一軒なればお伴の内幾人かお泊りに成ふ程に其支度を仕て  
 おかれよと主への高話を二人は圖らず漏聞て松前家の江戸家老とは誰なるらんと互に顔を  
 見合せけり

○第四十一編

談話前に返り却説吳服商福嶋屋安八は巖に島田の邸にてお八重より兄惣右衛門へ送る袷衣  
 を預りて家路に歸る路次此處彼處用達しを仕て思ひの外に暇を取り其夜の四つ頃に入江川  
 の入江橋迄來かゝり橋を半渡り懸し處へ後ろの方より窺ひよる頭巾を冠りし一人の武士物  
 をも言ず抜打に肩先一太刀切附つアツト一聲反倒を起しも立す止めの一刀々を鞘に安八が  
 落せし風呂敷搔探り小脇に抱きて獨言「此方の密事を探らんと忍込たるお八重の假親此安  
 八も油斷ならず殊にお八重の渡したる包みの中には敵への内通如何なる密書のあらむも知  
 れぬバ迹逐懸て切殺し包みを奪ふて立歸れど主人の嚴命に據るなく仇も怨みもなき和主を  
 刃にかくるも出世の仕度さ是も前世の因果と諦め吾等を恨まず成佛しんと死骸を河へ蹴落  
 して立歸らんとするその折柄橋の爪にて先刻より様子を窺ふ一人の非人何彼心に打點頭冠  
 りし手巾脱却て片手に引提げ身を平伏し今しも來掛る武士の足をすくひて引倒し起しも立  
 ず乗懸り手巾首にぐつと一締手早く衣類を剝取て吾身に附て大小手狭み頭巾冠りて高笑ひ  
 「此奴は確に島田の若黨此奴に化て一趣向平素の怨みを晴してくれん只今汝が手に掛たる

安八とやらの迹を透ひ死出の山路の道行させよといひつゝ、死骸を川へ蹴落しざんぶと立たる水烟迹白波と立去けり。島田の邸の門の戸をホト〜と打立さ。先刻旦那の御用を承りて他出なしたる水野半次郎只今立歸へれりといふ門番の老僕は寝惚し聲音にて「ナニ水野様と御苦勞千萬といひつゝ、潜戸おし明れば水野と名乗る壯士は頭巾眞深に忍びて裝束そのまゝにツト身をさし容れ「イヤ御大義と言捨て玄關指て歩行しが何思ひけん裏手に廻り庭の生牆押破忍入たる坐敷の庭坐敷は例の長夜の飲島田は己が股脇腹心二三の奸徒と謀叛の談合雨戸さゝぬべ燈火の燈火障子を漏て庭に指す光りに四邊を見廻せば庭の中央の櫻の梢に釣下したる女の死骸思はず吃驚と身毛卓堅恐惶ながら進寄見へ覺えの侍女お八重カアはて合點さ引返し坐敷の椽に身を寄て島田と奸徒の談合を耳傾て聽居たり。

○第四十二編

内には嶋田彌太郎が外面に側聽く人ありとも知ねば愈聲高やか又同志の者に打向ひ最誇貌に語るやう各方も御存知の通り敵の間者たる那のお八重は御覽の如く櫻の枝に釣下てあく迄拷問を加へし上一夜夜乾の苛刻の糺明元より柔弱さ女の身なれば夜半の嵐に吹散され明

日をも待て散る櫻夫より脆く夜の内に幽冥の人と成ると必定又お八重が假親にて先刻お八重より故郷の兄の許へ送る怪さ包を預りて歸りたる那の福嶋屋安八は若黨の水野半次郎を以て迹を逐せられ頼て渠が命と共に包を取て歸るならん忠義立する川村池澤又お松の方の三人は吾等の腹心金森權三といふ者に命じ渠が手下を八方に分て詮議さすれば頼て吾手に入るは目前又殿の御前は御寵愛篤さか鈴の方と心を合せ十分殿の機を取りたれば國の政事は心の儘殊に先頃よりお鈴の方に懐妊と披露させ彼の下館へ出養生未其上にお鈴の方の親元仙臺の山田屋宗太郎と示合せて小兒を求めさせお鈴の方の産子と披露なし随つて殿を始め敦丸君をも漸次に毒殺する手筈されば今年一年を出ずして松前一藩は吾手の内其時は貴殿方も榮耀榮華の仕放廻何と愉快き事には候はずやと鼻うごめかすも片腹いたし二三の奸徒は素より無智の小人殊に平生彌太郎の恩顧に預りてお髯の座を拂ふを身の勤めとす族なれば其議を聞て異口同音に「今に始めぬ貴殿の謀略孔明楠といへども遠く及べど煩に賞立る其中に山崎數馬といふ者一人小賢しくも膝を進め「只爰又一つの不審といふは凡を産婦をいふ者は如何に安産せしものといへ身の瘦せ顔の色にて一目に夫と知らるゝもの



仮令君公滅多に下館へおいでなきにもせよ人の兒を以てお鈴の方の産兒と披露するは些少  
 不都合には候はずやと言へ彌太郎打笑ひ「其處等に如才のあるものを豫て山田屋と示合  
 最早近々にお鈴の方を里方へ引取せ彼方にて万々趣向をすませサナ其上にて偽物の産の和  
 子を連させお鈴の方をばお館へ歸らす都合決して心配無用なり先前祝に大杯に快よく一獻  
 過し候へとさす杯を數馬は受け「殘る方なき深謀遠慮誠に感伏仕るといふ其傍より自餘の  
 面々卒前祝に整づくしと唄ふるあれは舞もありさいめさ渡る遊興娛樂外に御聴く壯士と聞  
 く事毎に打合點やがて拔足して庭の中央に至り何思ひけん先に見置たる女の死骸を櫻の梢  
 より手早く釣下し小脇に抱へて後手の生膂力任せに押破暗に紛れて逃去りけり此て彼壯士  
 はお八重の死骸を引抱へて泊川の片邊なる濱の辨天堂に連行さ堂の椽側に之を臥させやが  
 て枯枝を集めて火を焚附泊川の氷を口に含め手巾にしめし來りてお八重の顔に吹掛口中へ  
 しぼりいれ耳の端へ口さしよせて大音に「お八重さんへお八重どのへと續けさまに呼生つ  
 脊中を嚴しく打叩さしが未運命やつさざりけんお八重はうんと息吹返し焚火の光に其處  
 等見廻し吾身を執へし壯士の姿を詠めてハット驚き「妾は死せりと思ひし未も此世よ未

る事か此世にあらむ其方は定て島田の同類ならん何故妾を此處へと立上らんとする裾を那  
壯子は確と押へ是より如何なる事をいふや次編に於て分解すべし

○第四十三編

立上るゝ八重の裾を執へ無理に其場に引据へて那の壯士と詞優しく「若お八重さんどやら  
私は島田に怨みこそあれ決して彌太郎の同類ではなければ何も其様に吃驚する事はないと  
言ふにお八重は心の内愈不審の晴やらねば「島田の同類ならぬ其方が妾の名を知るのみか  
如何して此處へと半分請さず「サア其連出した仔細といふは私は元此城内に仲間奉公名を  
七助と云ふてお庭掃除を此身の職務お餘の方が島田へ送る密書を拾たが縁の始那の彌太郎  
と近附も成り其後彌太郎に頼れてお松の方を罪に陥す爲奥方附の侍女末野にお松の方の醜  
跡を構へたが彌太郎は非道も人を救ふお先に使ふた揚句の果に城外の鎮守の社で絞殺し  
松の梢に釘してれぬたを翌朝下して殿の菩提所崇福禪寺の墓原へ犬猫同様葬られたが未運  
命の盡ない處か其夜の夜中に息吹返して辛くも穴をば遣出して再度此世に歸へつたれど何  
分島田の威權強く國の政事を自由にする故汗瀾に世間へ顔も出し兼青森々固共處此處と遊

び歩いて悪事三昧頃來此地へ歸つて來ると間もなく時疫に取附れて二十日あまりは枕も上  
らず藥の力でようくと本の身体に成は成たが今は博奕の資本もなければ據るなく非人の  
境界かゝる果敢なき月日を送るも元はといへば島田の爲す業は彌太郎好機會もあらば渠  
が悪事を其筋へ訴へ積る怨を返してくれんと病後といひ且は非人に成下りて有し姿の變り  
しを幸ひ物乞ひに附托て朝夕島田の邸の邊をわちらと徘徊して猶も様子を伺ひをり  
しが今雷入江橋の橋の爪に筵一枚を夜着蒲團浮世の夢を見てゐる折しも橋の上にて怪しき  
物音頭を擡げて様子を聞バ仔細は確に分らねども平生聞慣た島田の若黨水野半次郎が聲に  
して生命に依てよんどころなく人を殺めし由の獨語是幸ひ渠を絞殺して衣類を奪ひ島田  
の邸へ忍込でアハよくバ島田に一太刀怨を伸べん若左もなくバ金まされ衣裳まされ手當次第奪  
去當座の心慰仕てくれんと紛込たる坐敷の庭園らず和主が櫻の木に釘されるのを醫爾と  
見認め自分が一晚松の木に釣れた昔日を思出し世の喩にいふ鬼の目に涙不便と思ふ夫計か  
若蘇生バ共々島田の悪事を訴人するか左もない時は勾引して娼妓に打賣博奕の資本と善  
と悪との二筋道爰迄和主をつれて來たのだ和主の名前をお八重と知つたは島田が同志の甲

乙に話してゐたのを聞た理全体和主は島田の爲に何故ア、いふ目に逢ふたのだと七助が其身の履歴を言出してお八重に委細を問かけたり

○第四十四編

却説お八重は七助の身の上話を熟々聞て些少心を安じ實は如何々々云々と其身が柳村なる惣右衛門といふ百姓の妹にて池澤川村の忠臣に加擔し出入の町人福島屋安八の周旋にて島田の邸へ問者よ入込し事より兄惣右衛門が横死の由を聞て安八に實地を探る事を打せしが其事よりして其身の問者なる事を彌太郎に知れ遂に苛刻の糺明に逢ふに至りたる事又若黨半次郎に殺されたるは其安八なるべしといふ途を一部始終に物語れば七助は聞く事毎に頻に嘆息し涙に頬を濡してをりしが頓て坐を改めてお八重に向ひ「池澤川村のお二人又お松の方様が忠と貞との爲に御苦勞なざるも實は感心の事ながら是は殿様の御恩に預る人々なれば元より當然の事と謂はゞ云ふべし返すくも感心なるは卿等兄弟のお志川村様の親御に卿等の父御が受たる恩を報る爲とて二人共に一命を捨て忠義に加擔するとは武士も及ばぬ壯健な振舞卿等の義心は感じて此七助奴も二十餘年の迷ひの夢が始て覺め漸く

眞人間に立返りましたと是より其身は呉服商福島屋安八が未二十前後の頃外妾にしてをりしかためといふ者の子なりしが未十歳未滿の頃かために先立れ其後悪友に誘はれて酒と色どに身を持崩し剩へ賭博をさへ甚く好みければ安八は更なり親族の者にも見放され一處不住の身となり中間奉公の揚句の果に非人に迄身を落せし事迄詳に懺悔し今宵しも島田の邸へ忍入たさに不圖人殺の罪を犯せしが幸ひに父安八の仇敵なりしは切てももの事なれば是より心を改めて卿と共に忠義の人々に加擔し舊惡を償ふ爲め更に新志を抽で彌太郎に誓さうとみ報ふ可れと涙に眞を示して赤心を吐露しければお八重は大に喜びつ、「卿が今いふ處に偽りなくば此上もなき便宜ながら島田が當時の權勢にては假令渠が惡事を訴出るも驚を鳥馬を鹿と言曲られ却て吾々が無實の罪に陥さるゝは必定さる思なる業をせんより一旦此地を立退て妾の故郷三の丘に至り兄の横死の様池澤川村の兩氏お松の方様のお行方を探り彼人々に御目に掛りし其上にて兎角の便宜に随ふまを好れど女子に似合ぬ例の果斷に七助殆ど感服なし夫より己が先刻半次郎の手より奪來りし包を開きて其中よりお八重の拾をとり出しお八重に着せて形粧を繕はせ自己は又忍頭巾に面を包みて夜明ぬ内にと其處を立

出南部を指てぞいそぎける

○ 第四十五、編

夫は儲置爰に又奸臣島田彌太郎は一味の甲乙を相手に夜通飲明し翌朝六時頃卒お八重を呼生て今一詮議せんと椽側へ立出しにお八重の姿の見えざれば是はと驚きて早速門番其餘家内の者共を喚出して其行方を尋れども誰とて知る者なく刺へ昨夜安八の討手に向けたる半次郎の居らざれば其仔細を糺すに亥中過に立歸たりといふ門番の答なれば彌不密晴やらず渠奴刃一敵方の間者にてお八重を連れて走りしか若爾ならば一大事と一味の甲乙を手分して二人の行方を探せしに半次郎の死骸は裸体にて入江川の川下に上りてありしお八重は遂に所在分らず彼是に依て想像するに川村池澤に一味の者が半次郎を殺害してその衣裳を奪ひ半次郎に身を化して耶又忍入お八重を奪ふて逃たるやうなればコハ由々しき一大事なり千丈の堤も蟻の一穴より崩るゝ世の喻彼等のために平生の企てを破られんもはかられねば油断ならじこの上は一日も早くことを行はんとお鈴の方と密議を凝し腹を殺すも奥方若殿のこの世にあつてはこと面倒なれば先此二人より押片附るこそ上策なれば夫には云々せ

んど日頃出入なる町醫青山順庵を呼寄殿よりの内命なれば毒薬を調合せよ効驗あらば御典醫に取立遣はさん是は當座の褒美なりと金拾兩を興へて強て配劑させ頼て其恩勞にとて酒肴を以て馳走なしその肴の中へ彼毒薬を入れて即坐し順庵を毒殺し後の破綻を防ぎ儲彼毒薬をお鈴の方に手に渡せばお鈴の方は其毒薬を豫て奥方より病氣見舞に贈りたる菓子の中へ仕込み置其翌日若殿教丸君の病氣見舞よかいであるを待て之を進めしがお附の者が脱目なき計ひにて小性早川由三郎といふ者に毒味させしかば此者毒に當りて若殿には恙なきを得たまひ一時計略の齟齬したれど元より胸逞しき女なれば少も驚く氣色なく密に彌太郎と相談して此お菓子はお方より拜領のお菓子なれどもより毒など入てあるべき道理なく若又毒の入てお方は奥方の妾を毒殺したまふ御心ありて贈りたまひしならんに一應お取調おらん事を願はしけれと言巧又言出て却て奥方を罪に陥入んと構へしは今に始めぬ二人の奸計憎みても猶あまりありといふべし

○ 第四十六、編

借もお鈴の方は己が罪を人に被せお方より頂戴の菓子に毒薬の加味してあるからは恐なが



ら奥方の妾を毒殺したまふ御心ありてあらぬ計ひせられしも知ねばいと憚る願には侍れ  
 ぞ一應奥方附の女中をお取調下さるやうと例の長舌を翻して殿に哀訴せしが殿には元より  
 飽迄心を奪るゝお鈴の方の言なれば更に疑ふ處なく平生其方を寵愛せるさへあるを頃來は  
 予が胤をも宿したればそを嫉く思ひてさる正なき事に及びしものならめ予が胤を宿したる  
 其方へ毒を進るは取も直さず予に毒を進るも同前憎さも憎き綾が振舞辛き目見せて白状さ  
 せ白状の次第に依ては嚴重の所置に及びてくれんと以ての外の御立腹にて直に奥方附の女  
 中甲乙中にも奥方のお氣に入りなる末野をば一人厳しく糾問ありしが素より知ぬ事なれば  
 就も只知ぬ覺ぬぬとのみ言張るにぞ殿には愈迫込たまひ此上に綾を糾明するより道はなし  
 と無慚にも奥方を一室に閉籠めお鈴の方附の女中にて常にお鈴の方の悪を扶る那のおふぢ  
 を始め意地悪の名ある甲乙に命じて不寢責にぞさせにける豫て申合せたる事なれば彌太郎  
 は此と聞て殿の御前にいで奥様お心得違ひの段如何にも恐入りたる事ながら嫉妬は女子の  
 常全く一時の御過失ならんに若殿様に免じて御用捨あるやう夫より捨置がたきはお松の方  
 を奪ふて立退たる池澤川村の兩人其後御領内は更にも謂す他藩の領分迄手に手をつくして

吟味すれども今に於て行方知ずかゝる族をそのまゝお拾置ありては政道の瓊瑾自然御家風  
 にも係る道理他藩の間々も如何なれば一日も早くお召捕ありて然べし夫に就て心憎きはお  
 松の方の父なる小堀力松此間より數々糾問せども只知ぬとのみ一圖の返答某察するに彼奴  
 親子の交際なれば知ぬといふ事はよもあらじされば奥様の御吟味より渠の吟味を先にする  
 が肝要と存せらるなど例の忠臣顔にて言出るを殿には今よ始めぬ彌太郎の注意小堀の糾明  
 は素よりながら綾の吟味も亦勿詰に致しがたし汝の意見をも用ひ予が所存をも行ふべけれ  
 と頓て改て彌太郎に小堀力松の吟味を委任されければ島田は得たりと力松を白洲に呼出し  
 お松の方の行方池澤川村の所在をいへど日々拷問呵責又奥には殿の御意を受けてお鈴の方  
 の侍女おふぢが綾の方を不寢責内と外とは無慚の振舞家老用人を始め家中の甲乙いさゝか  
 心ある者は奥方小堀の冤罪を憐みお鈴の方彌太郎の専横を憤り私に批評を下せども渠等が  
 權威を憚りて誰一人一言の諫一篇の状をも殿へ呈する者なく只息を凝して居たりしは是非  
 もなき世の景況なり

○ 第四十七編

彌太郎お鈴の方の兩人は奥方并に小堀力松を冤罪に陥入れ内々外々に無慚の呵責を加ふれども元來寛大な事なる故奥方も力松も死を決して白狀せざれば日夜拷問亂彈のことに關係ひ多くの日かずを送りしが此事に附き陽に上書献言する者こそ無れ陰に彼是批難する族も家臣に多くある由耳に入るのみならずお松の方池澤川村且はお八重の行方をバ其後猶も詮索に手をつくせども更に所在の分らねば流石に寢覺安うらず思ひ一夜又彌太郎はお鈴の方の出養生なす下館に忍行き豫ては奥方敦丸君の若木を先に枯し然る後に殿を毒殺なし夫より前に卿をバ仙臺の親元に引取せ偽子の馬脚を顯さぬやうする目的なりしが第一着に敦丸君に毒殺を過ち奥方小堀も罪に伏せず殊にお松藤次郎君太郎お八重の行方も分らねば世の喩に云ふ油斷大敵如何なる故障の起らんも計られぬに此上は短兵急に殿を毒殺し奥方をバ今度の罪を名として押籠めおき一旦敦丸君を世に立其紛擾の間に乘じ早使を以て密に仙臺より偽子を取寄て卿の安産の披露をさせ然る上にて緩々敦丸君を除く計略をせん彼毒藥用ゐて即座に效能を顯さする量目又數時間を経て效能を顯さする量目等詳しく願庵に聞置たれば殿をバ正午の茶の湯に吾方へ招待し則ち茶の中へ彼毒藥をを夜に入て效能を見す丈

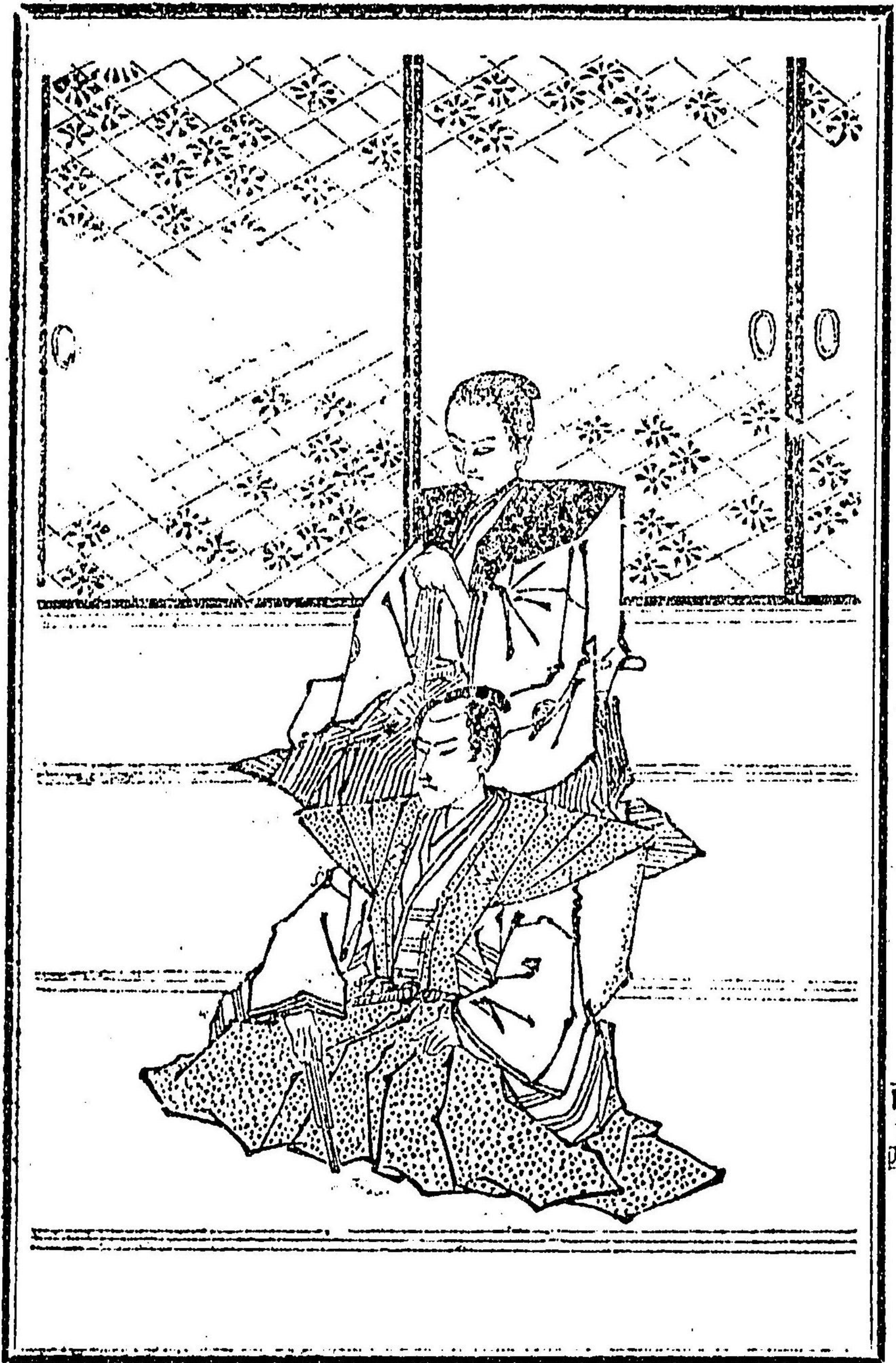
の分量を仕込て飲せ參らせん左すれば御死去の後彼はいふ者ありとて時刻過ての事なれば辨解の仕方は幾許もあべしなど猶も悪評を語合ひ其翌日殿の御前へ出仕して最恐多き願ひには候へども微臣が前裁の新緑且は晚櫻を御一覽かた〜鹿茶一服參らせたく御枉駕下さらば微臣が大幸此上なくこそ候へど低頭平身して言出しに平生御氣に入の彌太郎が願ひ殊に是迄兩三度も渠が邸へ臨みし事われバ更に一議にも及ばず平生性僻にして人と異り繁花を愛せず綠陰を愛すてふ唐人の物數奇までにはあらずとも新緑がくれの晚櫻初花よりは又一入めづらしき詠めなるべければ明日は必ず造作になるべしと早速の承諾なれば彌太郎は仕すましたりと思ふ心を色にも出さず忝けなき旨お受して其場を退きやがて何彼とそ支度して明るを遅しと待掛たる心の内の慚忍なる今更いふもあろかなり

○ 第四十八編

慶應三年四月七日鳥田彌太郎は今日しも茶の湯の式を営みて殿を自宅へ招待し奉るとて昨日より多くの人を使役し内外の掃除より飾附萬端をの結構いはん方なし先茶席の模様を言はゞ床よは宵柏翁蝶の和歌の軸を掛け前には宗全籠に早咲の牡丹を一輪活しを置き眞の臺

子に銀の惣具は目を驚と計りの結構時繪の臺天目不味好の茶入孰も善美を盡し之を數奇者に評せしめバ聊か派手に過たりとの誹もあるべけれど亦風流の趣を失はず又前裁の体裁はつくむひの水の清らかなる袖摺松の位置打水の加減總て能く法に叶ひたりやがて時刻に成りしが表の方俄くに騒しく殿様の御入と先觸の足輕の報知せに彌太郎は尉重目の小袖を着し鼠小紋の上下を附け玄關の式臺迄出向へ恭く兩手を支へ今や遅しと待受たりや、あつて殿のお駕籠を玄關横附に搔据れバ彌太郎は愈々恐入り低頭平身してぞ居たりける近從の某が駕籠の戸を明るが否や徐々と立出るは殿にはあらで一個の武士彌太郎の前にスツと立嶋田氏久しかりきと云に彌太郎不審に耐す頭を擡げて屹度見バコワソモ如何に殿にはあらで江戸詰の家老然も忠直のその名高き渡邊隼人にてありけれバハットは思へど不敵の本性少も逃てし景色を見せせ「君侯と思ひの外コワ稀らしや渡邊氏何時の間に御歸城ありしぞシテ今日は君侯の御名代にや好うこそその御來臨卒此方へと立上るを隼人はヤ、と呼留め「彌太郎殿お動きあるな拙者事昨夜歸國仕る今日は素より殿の御名代には候へどもお茶を頂戴には罷出ず些少貴殿に御不審の筋あつて御尋問の爲罷出たりといふに島田は倍は

と思へど態と落着不審の顔色「拙者に於て殿の御不審を察る覺えなければ別段御尋問には及バぬ筈「お黙止めされ其辨解もあらんかと此方よりは豫て其用意なし其方が悪事の段々十分心得居る確なる証人を數名召連來りたり「ナニ証人をお召連とや其証人に面談仕つらん「元よりの事にて候川村池澤早々是へと隼人が叫ぶ聲と共に伴の人数に紛れるたる藤次君太の二人の忠臣バラ〜と露出島田の左右に居合腰「奸賊彌太郎伏罪せよと詰寄る兩人をシロリと斜視双の肩にて薄笑ひ「證人とは如何なる者かと存せしに毒婦お松を連退したる人面獸心の奸賊共渠等を證人とは片腹痛しといふに二人は黙つと速込「己れこそ人面獸心其舌の根を引抜くれんと打もか、らん有様なるを隼人は叱と押し「その兩人にて證人御不足とあるからは外も御目に掛くべき者あり二人の者早々罷出よといふにツツ〜立出る兩人島田はツツ咄付て「己れは權三にか八重よな汝等予が目を掠て金錢衣類を持逃せし悪僕奸婢何の面下て主人の前へは立出しぞ下り居ふと叱附隼人に向つて莞爾笑ひ「渠等兩人は拙者の召使何も不屈の働さ暇も乞で逃去しもの彼等を証人とは懼りながら御家老のお目鏡違ひ彼等の申す事は世の喩にいふ引れ者の小唄決してお取上下さるなど言涼く



言放すを隼人は聞いて打點き「然バ猶呼出すべき兩人の証人ありといひつゝ若黨に指彈すれ  
バ隼人が乗たる駕籠の中より手を取り引出す一人の女下部の中より徐々と引連來る一人の  
男スハ何者と彌太郎は瞳を定て見てあれバ男は先年手に掛たるお庭掃除の下男七助女はお  
鈴の方なれば流石の島田も吃驚として思はず嘆息默然たり

○第四十九編

當下渡邊隼人は彌太郎に向ひて屹度成り奸賊彌太郎かくても猶陳する處ありや汝何程長  
舌を蹴すも毒婦お鈴が既に是迄の隠謀惡計一々白状及びたれば逆も免るゝ道はなし今更  
卑劣なる辨解を費すより潔く罪に伏せよと云ふその言も終らぬに池澤川村權三七助最早是  
迄の運命と覺悟して速に伏罪せよ潔く白状致されよと異口同音に迫りけり彌太郎は無念の  
顔色拳を握り齒を齧締默然として居たりしが今は免れぬ處と覺悟をや定めけん隼人に向  
ひて從容と「此く多くの證人あるのみり既にお鈴の方にもかゝる始末に及び給ふ上は今更  
陳謝の言を費すも無益の至りなり卒御存分に致されよと流石の彌太郎少も周章ず眼を閉て  
其餘を言ねバ隼人は見つゝ感嘆し尋常の振舞流石は島田彌太郎なり池澤氏川村氏ソレ

と指彈の下にハツト計り藤次若太の兩人は右左より彌太郎の上下を取除け引立れば權三七  
助兩人はお鈴を引立静々と渡邊隼人が先に立白洲を差して越ける抑池澤川村お松の方お八  
重權三七助の人々が如何にして渡邊隼人と共に歸城せしぞと其手續を尋れば池澤は江戸へ  
出る途中恰好し隼人が島田の專横を聞及び取調の爲歸國するに邂逅島田の妻お民が遺書を  
證據に彌太郎お鈴の方の叛逆を逐一に上申し其處より之に伴て仙臺の城下迄來りし折柄是  
より先川村藤次郎と金森權三は仙臺の宿屋にて邂逅互に名告を告て語合ふ時しも松前藩  
家老の家泊觸有を怪み翌日來着を待て開合せしに手なる哉彼の渡邊隼人にて然も池澤も同  
行なれば直に而會してお松の方の在所を告公然掛合て事敵方へ漏るバ一大事なれば姑く穩  
便に事を取こそ上策ならめとやがて權三はお松の方の兄と名告て山田屋宗太郎方へ掛合相  
當の代價を出て之を償ひ川村が介抱し奉る梅丸若と共に保護しまゐらせ三の戸迄來りし處  
七助お八重の兩人も此事を聞傳ひて出來り猶も細に彌太郎お鈴の方の近事を訴へければ愈  
々道を急ぎて四月六日の夜密に福山城に馳込直に肥後にお目通して兩人の悪事を詳に述べ  
懇に諫め奉りしが殿にも始めて夢の覺たる如く只管前非を後悔したまひ兩人の所置は渡邊

に任するとの仰せありしかを即刻下館に至て鈴の方を鞠問せしに從來の悪事は更なり明日茶の湯を名として殿を毒殺する隠謀ある迄盡く白状せしかばはとて其用意を爲て渠が奇に應ずるに此方も奇を用んぞやがて隼人は殿に打拵て態と茶の湯に臨み一時に島田が奸を押ししものなりと

○第五十編

其説江戸家老渡邊隼人は奸徒鈴彌太郎を始め一味の甲乙を改めて白洲へ呼出し重ねて厳しく究問しけるに已に證據分明なれば債の悪人等も陳ずるに言葉無く是で巧みし隠謀を逐一白状に及びしる隼人は聽てお鈴の口供と共に之を殿の一覽に備へ其指揮を仰ぎ遂よか鈴彌太郎は斬罪に定り日を期して刑場に引出されたり悪人一旦墜んなるも争であ天羅を遁れ得ん遂に餘殃の風吹きては忽ち其身斷頭場裡の露と消ゆ永く悪名を遺すこと古來照々たりと雖も痛しい哉人私慾の爲に良心を蔽はれ稍もすれば悪に流れ易く竟に一生を誤る者多きが中にも此鈴彌太郎の如きは恩を受けて恩を忘れ善人を誣て不逞を謀り一旦志ざしを得ると雖も不義の快樂いかでか永く續かんや今此刑場に引出され獄卒の手に罹りて

竟に非命の死に終焉亦宜なるかなかくて其餘一味の甲乙は罪の輕重より或は追放せられ又は監居となり夫々所刑行れたり夫引換へ忠臣の面々は爰に榮ふる時來りお松の方を元の如くお部家に直し梅丸君を改めて次男の披簾をなし川村池澤は吾々録二百石を加増して川人に登庸ひ兩人ども未だ獨身なればお八重を川村の妻よか松の方の侍女おのふを池澤の妻に婚嫁せ金森樵三は舊惡を謝免して十分に取立られ七助も同斷舊惡を免じて福島屋安八の來名を相續させらる但し若黨半次郎を殺害せしは偶然父の仇を復せしなれば其罪を問はれず吉五郎八藏の兩人は褒賞各差等あり是より先奥方並らびよ小堀力松の兩人は全くお鈴彌太郎等の奸計に罹りてかくは痛ましく憂目に逢はれたるなりと事情判然として其罪の冤ある事明白に分りければ奥方は即刻元の位に返されて一入手厚く取扱はれ小堀は五十石の加増を給はりに復しければ藩子は千秋をとなへ農商工は刃歳を唄ひさめく四海波いと静やかに治まれる君が代と計侶に唱れて伉儷の盞杯を酌替したる池澤等の欣びは譬へん方もなくいよ忠義の心を擧ぎます誠實な仕へしかば松前家の松の縁又ひとしほの色添へて千代も八千代も榮えける恁て王政維新の御代となり廢藩置縣のその後は舊地

の國産を増植  
 させ御國の富  
 運を開かむと  
 舊臣等爰に奮  
 發して彼松の  
 方のお腹なる  
 梅丸君を請じ  
 或社の長と仰  
 ぎ今現に北海  
 道に在して盛ん  
 のとに従事さるよし陸奥  
 の松風に便り聞得し事情を  
 一冊の小冊子にのり綴り江



湖へ發刊するもいさゝか勸善懲惡の端になれかしと思ふのみになる

福山 陸奥の松風終  
奇談

明治二十年三月四日翻刻出版御届  
同 年四月 出版

定價金八拾錢

原版人

法木菊次郎

日本橋區元大坂町十一番地

翻刻人

井上勝五郎

京橋區南紺屋町一番地

發兌元

薰志堂

大賣捌書林

兎屋 春陽堂 上田屋 鶴聲社  
山口屋 土岡屋文助 鈴木喜右衛門 大川屋

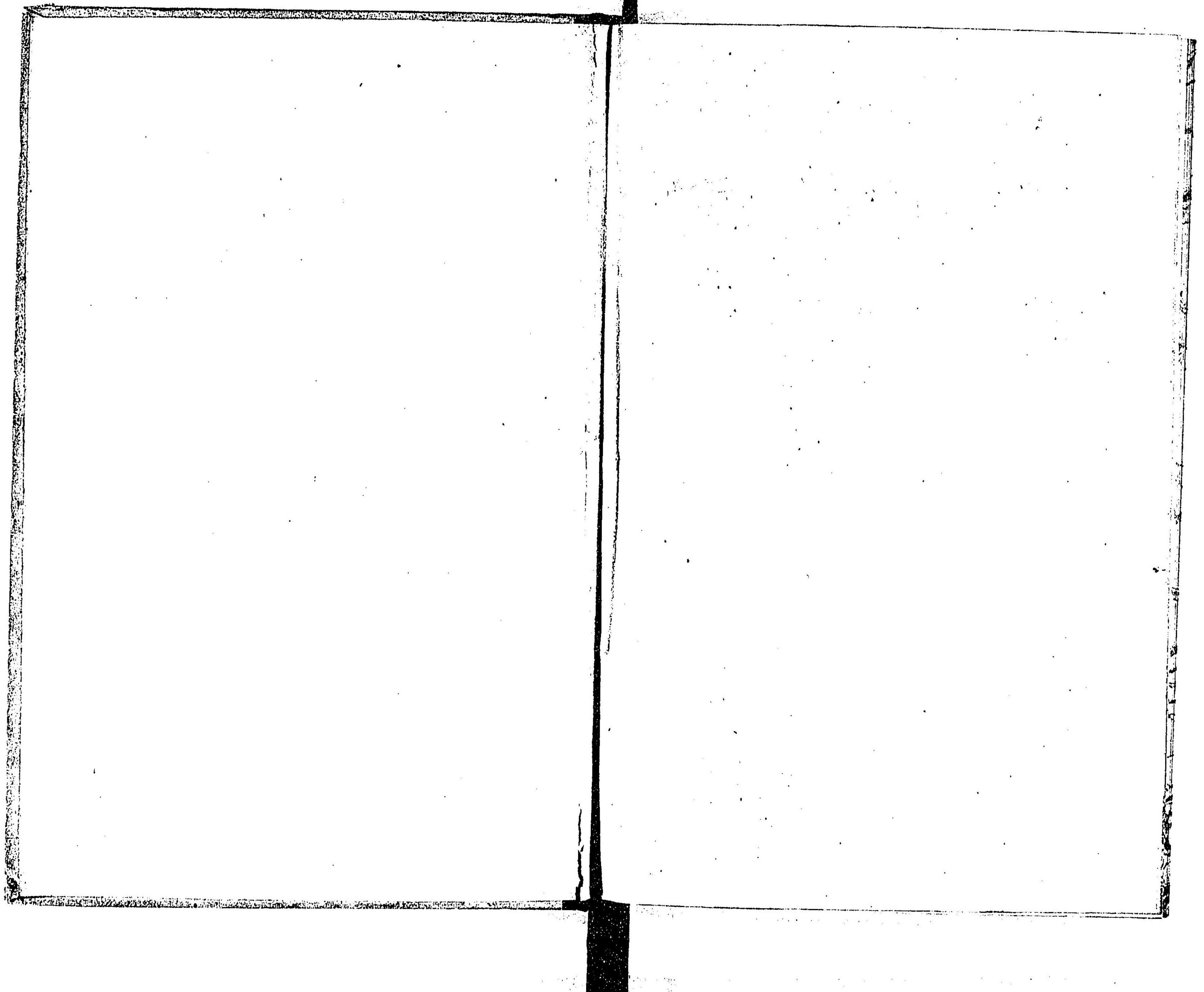


# 薰志堂書目

四聲字典	眞卿伊呂波節用	新撰いろは字引
獨學英語自在	獨學英語通辨	ニユーナショナル 第一リーダ案内
片唐詩撰	三體詩	端唄大全
げいしや手箱	逸大全	和年代記
新撰算法	和算通書	造化懷妊論
三元方位便覽	里程大日本新撰地圖	大日本興地全圖
四君子畫譜	開化用文章	改正東京新圖
國道中記	法華回向文	九子護身法
ヒフカナ付 易學小筌	横文字伊呂波	小百人一首
番道往來	千字文講譯	實語教童子教

京橋區木挽町壹丁目十四番地

魁文堂印行



0